

宮城教育大学機関リポジトリ

伊達政宗漢詩校釈

著者名(日)	島森 哲男
雑誌名	宮城教育大学紀要
巻	47
ページ	373-398
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00000244/



DATE MASAMUNE (伊達政宗)'s Chinese Poetry (漢詩)

—Text, commentary and translation—

SHIMAMORI Tetsuo

要 旨

伊達政宗は漢詩を33首残している。本稿はその校訂、注釈、現代語訳である。これらの注釈作業を通じて、我々は伊達政宗の中国文学に対する基礎的な知識や、日本の王朝文学の流れを汲む伝統的な花鳥風月の美意識、そして漢詩を通じての当時の知識人との交流の跡を確認することができる。

キーワード：DATE MASAMUNE (伊達政宗)
Chinese Poetry (漢詩)
Commentary (注釈)
Chinese Literature (中国詩文)
Japanese classical sense of beauty (日本の伝統的な美意識)

(平成24年9月28日受理)

一欄霞四囲	円真
万木并参同	参雨（清岳）
吟興如無月	宗松
ユフカケニ見ル花ノ叢	祥景
ハルハルト露深キ野ヲ分テキテ	玄信
ニハカニスサム末ノ山風	兼益
谷流琴韻好	玄策
とある。	

更に一転して今眼前観るところの此の海の外には海が無いよ、三千世界を繞る海は皆これと一ツ海であるよと暗に四海一家の意を託し。又天の境界は何処であるかなどといふ愚問を發しては、いけないよと普天の下皆王臣であるといふ意を寄せられたのではあるまいかと恐察するのである。」深い読みであるが、ここでは広い海を前にして言葉を失い、「暈字」を使って詩を作つてみたという程度に解しておきたい。

【存疑二】 春夜即事

月有清香如此稀

疑身徒不夜城来

夢余忽被嬋娟誤

未到曉鐘開竹扉

春夜即事

月に清香有るも 此の如きは稀なり

疑うらくは身 不夜城に徙り来れるかと

夢余 忽ち嬋娟に誤られて

未到曉鐘に到らざるに 竹扉を開く

□「講釈」

▽七絶。上平声五微韻（稀・扉）（承句踏落し、来は仄韻）。

●作詩年未詳。

○即事 その場の事物や景色をそのまま詠じた詩。

○月有清香 「清香」は清らかな香り。蘇軾「春夜」に「花に清香有り 月に陰有り」とある。或いは「清光」の誤りか。○不夜城 昔、斉の国、東萊県にあった城。夜に日が出たのでそう名づけたという。蘇軾「雪後、乾明寺に到り遂に宿す」に「門外の山光 馬も亦た驚く、階前の展齒 我先ず行く、風花誤つて入る 長春苑、雲月長く臨む 不夜城」とある。○嬋娟 あでやかで美しいさま。ここでは月を表す。蘇軾「水調歌頭 丙辰の中秋、飲飲して旦に達す。大いに酔い此の篇を作り、兼ねて子由を懷う」に「但だ願わくは人の長久にして、千里 嬋娟を共にせんことを」千里離れても、美しい月を共に眺めたいものだ」とある。○曉鐘 あかつきの鐘の音。賈島「三月晦日 劉評事に贈る」に「君と共に今夜 睡るを須いず、未だ曉鐘に到らざれば、猶お是れ春なり」とある。○竹扉 明の高青邱「何隠君の小墅」に「家を移して別墅を営む、一逕 竹扉開く」。

月は清らかな光に満ちて明るいが、今宵ほど明るい夜もめずらしい。こう

して月を眺めていると、自分があの不夜城に来てしまったのかと疑うほどだ。一眠りして夢から覚めると、あまりに美しい月にころりとだまされて、まだ夜明けの鐘がなつてもいないのに、夜が明けたと思って門の戸をあけてしまった。

* * *

【附録二】『治家記録』に政宗を含む数人がいつしよに作った、「漢和聯句」といわれる和句と漢詩の句をまじえた連歌のようなスタイルの作品が載せられている。大谷雅夫「歌と詩のあいだ 和漢比較文学論攷」二〇〇八年、岩波書店刊によれば、「和漢聯句は、室町時代から江戸時代初期にかけて、朝廷の君臣、また禅僧、儒者、連歌師たちの集うところ、時に連歌をしのぐほどの人気を得て楽しまれた和漢の詞章の遊びであった」という。ここでは政宗が加わっている二つの「和漢聯句」を挙げておく。

〔一〕寛永五年六月廿七日条に「朝、東禅寺嶺南和尚へ御茶進セラル 御相客稲葉佐渡守殿、柳生又右衛門殿、道寿、三塚氏不知、長谷川等胤ナリ。漢和及ヒ御詩歌アリ、左ニ記ス」として、

無興催興客

政宗

以仁行仁公

嶺南

涼軒忘日永

三塚

国策遇年豊

雲外

開山ヤ出イル袖ノツトフラン

兼興

コナタカナタニ駒イハフナリ

等胤

以下、和歌四首、漢詩（七絶）四首を記す。

〔二〕寛永六年二月十七日条に「覺範寺清岳和尚へ御饗応トシテ御出、碧岩集講談、畢テ詩歌漢和御会アリ」として、政宗の漢詩「芳園春」既出、十四「芳園春」から始まり、漢詩十四首及び和歌三首を記した後に、

漫興

春宴忘歸去

政宗

砌ヲカサル梅ハ紅

法橋兼興

して作られたものかも知れない。

【補二】 失題 張散樂使諸臣倍（陪）觀時樓（桜（？））花盛開

失題 散樂を張り諸臣をして倍（陪）觀せしむる時 樓（桜）
花盛んに開く

惜哉酒宴幾何人 惜しい哉 酒宴 幾何の人
爛醉未醒惱我身 爛酔して未だ醒めず 我が身を悩ます
見説庭前吟詠夥 説くならく 庭前 吟詠夥し
白桜似雪落花春 白桜 雪の似し 落花の春

□『貞山公集』（東京大学史料編纂所蔵本〔古典文庫〕『伊達政宗公集』所収）。

▽七絶。上平声十一真韻（人・身・春）。

△詩題の「倍觀」は「陪觀」の誤り。また「樓花」は「桜花」の誤りか。

●作詩年未詳。

○散樂 猿樂、能樂。 ○陪觀 貴人に陪席して能樂の見物をする。李嶠「琵琶」の詩に「將軍曾て曲を製し、司馬屢ば陪觀す」。○惜哉 「惜しい哉」はこの詩全体にかかると見るべきだろう。酒宴を楽しむ臣下たちと、春の逝くのをひとり惜しむ政宗との意識の違いを強調して、風流を解さぬ臣下たちに「惜しい哉」と言っているのである。○爛醉 大いに酔うこと。杜甫「杜位宅守歲」に「誰か能く更に拘束せん、爛酔是れ生涯」。

能樂の催しに諸臣を招いたが、何とも惜しいことだ、逝く春を惜しむのも知らず、酒宴の果て、みな大酒を食らっていつこうに醒めやらぬとは。わしは情けない。庭ではあちこちでみな歌を詠むやら吟ずるやらしているというが、そうしているあいだにも、白い桜の花びらははらはら散って、まるで雪のようではないか。春も逝ってしまうというのに、落花を惜しまずに大酔するとは、何とも惜しいことだ。

【余説】この詩、東京大学史料編纂所蔵本『貞山公集』以外に見えないが、「十六題闕」〔寛永十二年（一六三五年、六十九歳）三月十一日の作〕の詩の承句「惱老身」、

結句「落花春」と同工で、確かに政宗の詩と思われる。「十六題闕」と近い時期の作か。同詩に「千紅万紫 総て塵と成る、惜しむ可し 李桃 老身を悩ます」とあるのと同じく、惜春の情を詠ったものであるが、この詩では「惱我身」三字の落ち着きが悪い。あるいは未完の作として廃棄されたものが、何らかの事情で残ったか。

【補三】 遊石巻

青天涵碧海 青天 碧海に涵し
碧海接青天 碧海 青天に接す
海外更無海 海外 更に海なく
向天莫問天 天に向いて 天を問う莫れ

□『松陰』

▽五絶。変格。

△詩のルールに拘らない変格の五絶。青天・碧海・海・天を疊字として繰り返して使っている。『聯珠詩格』に疊字の格の例として、唐の李涉「水月台に遊ぶ」の「水は晴天に似 天は水に似たり」という詩句が挙げられており、それに倣ったような句づくりである。

●作詩年未詳。

○問天 『楚辭』天問篇に「九天の際、安くにか放（いたり）安くにか属（つく）く、天は何れの所にか沓（あ）う、日月は安くにか属く」などとある。

青い空は紺碧の海に影を映し、紺碧の海は青い空につながっている。この海は果てしなくどこまでも広がり、その向こうに別の海は無い。その海を覆う天はどこまで広がっているかと、天に向かって尋ねてみても詮無いこと。海も天も果てしはないのである。

【補説】『講釈』にこの詩を収めて以下のように記す。「此の御作は短篇と雖も実に氣象雄大にして宇宙を一ト呑みにせられたやうな感じがいたします。先づ一、二句に於いて天が上より海に映り、海が下から天に連り水天一色となりし光景を叙べて、君臣の間も上下心を一にして互に相親合うこと斯くあらまほしとの意をほのめかされ。

かひそかに期したものだ。もうあれから四十年。年を取ってみると、もういくさのことなどまったく関心なくなり、ただ春風吹く桃や李の花の下で盃を取る風流韻事にうつつをぬかすばかりとなったわい。

仙台黄門君御詩稿終

* * *

【附録一】本稿底本に未収の漢詩が四首ある。

1 「朝鮮之役載一梅而帰裁之後園詩以紀」

・ 仙台叢書本『伊達の松陰』附録「詩文門」

・ 宮城県図書館蔵本『仙台黄門君詩歌稿』巻尾補記

・ 東京大学史料編纂所蔵本『貞山公集』

・ 千坂庸夫「伊達政宗卿御詩講釈」

2 「失題 張散楽使諸臣陪〔陪〕観時楼〔楼〕花盛開」

・ 東京大学史料編纂所蔵本『貞山公集』

3 「遊石巻」

・ 宮城県図書館蔵本『仙台黄門君詩歌稿』巻尾補記

・ 千坂庸夫「伊達政宗卿御詩講釈」

4 「春夜即事」

・ 千坂庸夫「伊達政宗卿御詩講釈」

このうち「春夜即事」は千坂が何の書に拠ったか出所不明。今はとりあえずこの四首をここに補い注釈を加える。ただし「遊石巻」「春夜即事」は変格でほとんど詩の体を為さず、「朝鮮之役」も起句踏落し。「失題 張散楽使諸臣陪〔陪〕観時楼花盛開」は句錯雑、意味不明のところがある。これらが「詩稿」に収録されなかったのは、あるいはこれらの欠陥のためかもしれない。

【補二】朝鮮之役載一梅而帰裁之後園詩以紀

朝鮮の役に一梅を載せて帰り、これを後園に栽う。詩以て紀す。

絶海行軍帰国日

海を絶り 行軍して 国に帰る日

鍔衣袖裡裹芳芽

鍔衣袖裡 芳芽を裹む

風流千古餘清操
幾歲閑看異域花

風流千古 清操を餘す
幾歲か 閑に看ん 異域の花

□「松陰」、宮城県図書館蔵本『仙台黄門君詩歌稿』巻尾補記

▽七絶。下平声六麻韻（芽・花）変格（起句踏落し）。

●作詩年未詳。文禄二年（一五九三年、二十七歳）、朝鮮の役より帰国の際、持ち帰った臥龍梅について、後から作ったもの。晩年の作か。

○絶海 海を渡る。「絶」は渡る、越えるの意。○鍔衣袖裡「鍔」は「鉄」に同じ。「鍔衣」は鎧。唐の王烈「塞上曲」に「紅顔歳歳 金微に老い、沙磧年年 鉄衣に臥す」などある。「裡」は中。○裹芳芽「裹」はつつむ。伝えるところによれば兜を鉢にして梅の苗木を持ち帰ったという。○清操 清らかなみさお。宋の文天祥「正気之歌」に「清操 冰雪よりも厲（はげ）し」とある。ここは梅の清らかさを言う。○閑看「閑」は「そぞろに」。心静かにのんびりと。○異域 外国。ここでは朝鮮を指す。

海の果てまでいくさに出かけ、ようやく国に帰るといふ日、ひそかによろいの袖に梅の花を包んで持ち帰った。この梅の花の清らかさは、その風雅、千年の後まで伝わろう。この異域の花を庭に植えて、毎年、心静かにのんびりと眺めるのだ。

【余説一】石川忠久「伊達政宗の漢詩」(『仙台市史のしおり』vol.24)にいう、「鉄衣の袖に梅の枝を包んで帰る」とは、いかにも武将らしい風流の心を詠っている。日本人の美意識と言つてよいだろう。表現もよくこなれており、政宗の作品中第一に推すべきものである。」

【余説二】仙台市教育委員会による若林城発掘調査（第九次、平成二〇年）で発掘場所（現宮城刑務所）の東北隅にL字型の堀の跡が発見された。教育委員会によれば、この堀はその南側の公の表御殿と、北側の私的な「奥」を区切るためのものと想像されるという。その「奥」にあたる場所のちょうど東側に「朝鮮梅」が今も残ることから想像すると、政宗は「奥」の庭に朝鮮から持ち帰った梅を移植して楽しんでたようだ。この詩はあるいはその庭が完成したとき、梅を眺めながら、若かりし日を懐古

年」と違って、年少（わか）いの意で、青年期のこと。唐の許渾「秋思」の詩（『三体詩』巻一）に「昨日は少年 今白頭」とある。「少年」と「馬」が結びつく例として、王維の「少年行（若者の歌）」四首が挙げられる。「其の一」では少年の遊侠が馬に乗って酒樓に繰り出す。「其の二」では馬に乗って戦に出る。「其の三」では金の鞍に跨り敵將を撃つ。「其の四」では凱旋して祝宴に臨む。また唐の令狐楚「少年行（聯珠詩格）巻四」に、「少小より辺頭にて放狂に慣る、番馬に驕驕して黄羊を射き、如今 年老いて筋力無し、独り宮門に倚りて雁行を数う」と、馬を乗り回していた若い頃と、年老いた今とを対比している。政宗が「馬上少年過ぐ」と語るとき、これらの詩がおそらくその念頭にあった。さらにそう歌い出す背後には、陸賈の言を踏まえて、昔は武力一辺倒であったが、今の自分は違う。詩や和歌を愛する文人である、という自負の念もあろう。○残軀 晩年の自分に残されたこの老軀。老者自謙の語。○天所赦「赦」は過ちを赦す、罪を赦す意味だから、ここは「許」等の字を使うべきだったろう。○不樂是如何 陶淵明「山海経を読む」其の一に「俯仰して宇宙を終う、樂しまずして復た如何」とある。ここで「樂しむ」というのは若いころの「馬上」に対して、風流韻事を愛する文人としての老後の樂しみを強調して、「武」だけでなく「文」に生きる教養人としての自負あるいは自足の念を示していると読むことができる。同時の作と思われる七絶「醉余口号」の「老來識らず 干戈の事、只だ把る 春風桃李の扨」がまさにその対比を示している。

若かりし頃は馬に跨って戦場を駆け巡る日々であった。年を経て、今や徳川の御世、世は太平。馬に跨り暴れる時代ではない。私も年を取り、すっかり白髪頭になった。この老残の身は天の神様の恵んでくれたもの。せいぜい残りの日々を楽しく過ごしたいものじゃ。

【余説一】瑞巖寺の雲居居士の法語（仙台市泉区永安寺所蔵。瑞巖寺博物館「雲居展」図録（一九八二年 瑞巖寺博物館刊）二五頁所収）に「誰云馬上得天下。自古英雄悉解詩。」（誰か云う、馬上 天下を得と。古より英雄 悉な詩を解す）とあるのは、政宗のこの詩を踏まえて、政宗が「馬上」の武人であるばかりでなく、「詩を解す」る

文人であったことを褒めているのである。知己の言というべきだろう。

【余説二】石川忠久氏の「伊達政宗の漢詩」（『仙台市史』資料編⑬附録「仙台市史のしおり」2013年所収）には云う。「第一句には、白樂天の影響があるかもしれない。白樂天が旅の途中、馬上でうとうとし百歩行く間にいろいろな夢を見て、覚めて詠った詩の句に、「馬上幾多の時、夢中無限の事、誠なるかな達人の語、百齡も一寐に同じ」というのがある。馬上で行くうち、あつという間に年老いる、という主旨が似ている」と。

【余説三】松平定信の『退閑雜記』巻四に「馬上少年過、世平白髮多、殘軀天所赦、不樂是如何、といふは仙台黃門政宗の詩なりといふ。しかるに馬上青雲過、世平白髮多、老軀天所赦、不閑今如何、といふなる詩、氷川詩式にあり。いかにも唐人の句調なりとかいふ。」とある。『氷川詩式』は明の梁橋の撰で作詩の入門書的内容（明の隆慶五年（1571）の刊。日本では万治三年（1660）に和刻本が出ている）。しかし『氷川詩式』十巻のどこを検しても「馬上青雲過」の詩は見えない。なお検討を要す。

三十 同

四十年前少壯時

功名聊復自私期

老來不識干戈事

只把春風桃李扨

同じく

四十年前 少壯の時

功名 聊か復た自ら私かに期す

老來 識らず 干戈の事

只だ把る 春風桃李の扨

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽七絶。上平声四支韻（時・期・扨）。

●作詩年未詳。前作の五絶を七絶にしたもの。前作と同時であろう。

○自私期 人知れずひそかに心のうちで期していた。○干戈 いくさのこと。「干」は「たて」、「戈」は「はこ」。○春風桃李扨 春風に吹かれて花見酒。「扨」は酒盃。「醉余口号」五絶の「不樂是如何」の「樂」の内容を具體的に述べている。「春風桃李」の語、白居易「長恨歌」に「春風桃李 花開く日」と見える。

四十年前の二十代のころは、ひとつ戦場で功名を立ててやろうと、いささ

日暮風。何に基づいての引用か不明。

【余説三】 政宗の手紙の末尾「薰風自南来、殿閣生微涼」を、後日「南ヨリ吹ニシ風ノ匂ヒキテ涼シサソフルヒナノスマ井ニ」と和歌にしている（『治家記録』寛永五年六月廿七日の条。政宗六十二歳）。それに和して嶺南和尚、柳生宗矩、雲外、三塚、道寿、兼與らが詩や歌を詠んでいる。

廿八 欲征南蛮時作此詩

邪法迷邦唱不終

欲征蛮国未成功

凶南鵬翼何時奮

久待扶搖万里風

南蛮を征せんと欲せし時 此の詩を作る

邪法^{じやほう} 邦^{くに}を迷わし 唱^{とな}えて終^やまず

蛮国^{ばんこく}を征^{せい}せんと欲^{ほつ}して、未^{いま}だ功^{いさ}を成^なさず

凶南^{とくなん}の鵬翼^{ほうよく} 何^{いず}れの時^{とき}にか奮^{ふる}わん

久^{ひさ}しく待^{まち}つ 扶搖^{ふよう}万里^{ばんり}の風

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽七絶。上平声一東韻（終・功・風）。

△「唱不終」、『松陰』作「唱未終」、「未成功」作「不成功」。

●作詩年未詳。

○南蛮 室町時代以後、ルソン・タイ・ジャワ・マレーなど東南アジア諸国の称。またそこに殖民し、或いは經由して日本に渡来した、ポルトガル人・スペイン人の称。 ○邪法 伴天連宗（キリスト教ローマカトリック）を指す。秀吉の「伴天連追放令」（天正十五年、一五八七年）に「日本ハ神国たる処、きりしたん国より邪法を授け候儀、太以て然るべからず候事」とある。 ○唱不終 秀吉の「伴天連追放令」以後、江戸時代に入り家康も慶長十七年（一六二二年）直轄領に禁教令、翌慶長十八年（一六二三年）禁教を全国に及ぼしたが、一方で貿易を奨励していたこともあって、禁教の実は拳がらず、信者の数が増える状況にあった。 ○凶南鵬翼・扶搖万里風 『莊子』逍遙遊篇に「…化して鳥と為るや、其の名を鵬と為す。鵬の背、其の幾千里なるかを知らず。怒して飛べば、其の翼は垂天の雲の若し。是の鳥や、海運くとき則ち将に南冥に徙らんとす。…鵬の南冥に徙るや、水を撃つこと三千里、扶搖に搏ちて上ること九万里、去るに六月の息を以てする者なり。」とある。

切支丹の邪法が日本の国を迷わし、禁止の令にもかかわらず、ひそかに唱え広めて止まない。そこで彼らのやって来る南蛮の国を征伐してくれようものと思つたのだが、未だ手柄を立てかねている。南冥めざし翼を広げて飛び立つ鵬のように、南蛮を征する軍隊を派遣したいものだが、いつその翼を羽ばたかせることが出来ようか。もう永い間、扶搖万里のつむじ風が起こつてくれるのを待っているのに。

【余説】 秀吉が「伴天連追放令」を出したのが天正十五年（一五八七年）。江戸時代に入り慶長十七年（一六二二年）直轄領に禁教令、翌慶長十八年（一六二三年）禁教を全国に及ぼした。同年、政宗は宣教師ルイス・ソテロの勧めで支倉常長らをヨーロッパに派遣している。この詩はそういう状況の中で、幕府から疑われるのを恐れて、意図的に作つた詩ではないかと想像される。

廿九 醉余口号

馬上少年過

世平白髮多

殘軀天所赦

不樂是如何

醉余の口号

馬上^{ばじょう} 少年^{しょうねん}過^す

世平^{よたひ}らかにして 白髮^{はくはつ}多し

殘軀^{ざんぐ}は天^{てん}の赦^{ゆる}す所

樂^らしまずして是^{こゝ}れ如何^{いかん}

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽五絶。下平声五歌韻（過・多・何）。

●作詩年未詳。

○口号 詩の表題の用語で、口に随い、心に浮かぶままに（文字に書かずに）吟詠するという意。口ずさみ。即興の詩。杜甫に「口号」と題する詩が多い。「晩行口号」「紫宸殿退朝口号」「存歿口号」「西閣口号呈元二十一」「喜聞盜賊総退口号」など。 ○馬上 馬に跨って戦場を駆け巡る。『史記』陸賈伝に、儒者の陸賈がことあるごとに詩・書を説くので、漢の高祖劉邦がうるさがって、「逎公（おれは）、馬上に居りてこれ（天下）を得たり。安んぞ詩書を事とせん」と言つたところ、「馬上に居りてこれを得たるも、寧ろ馬上を以てこれを治む可けんや」と答え、「文武並用」の必要性を説いたとある。 ○少年 現代語の「少

りませんでした。和尚もさぞお喜びのことと拝察します。歓喜の笑顔が、あたかも鏡を開けばそこに見えるかのようです。

四月十八日、浅野彈正少弼父子（浅野長政・幸長）は関の声を上げ軍旗を掲げ、蔚山目ざして進軍しました。三日を経て蔚山城に着くや、敵は応戦もせず逃げ出すありさま。あるものは谷に隠れ、あるものは海浜に逃れました。これを追って歩卒が討ち取った者の数は、とても数え切れぬほどです。この地には川があつて、そのほとりに新たに城を築きました。そして亀井武藏守（亀井茲矩）をその地の固めとして配備しました。それからまた二日かかつて梁山（ヤンサン）城に入りました。城は日本軍の兵士の守る倭城です。しかし我々が朝鮮に渡ってから、一治一乱、趨勢を弁えることができません。

最近、大明国は勅使（沈惟敬）將軍（李如松）以下二人の使者を遣わして、大明・高麗・日本の三国で再び和を講ずることとなりました。そこで洛陽城（漢城）を守っていた軍勢は、羽柴備前宰相（宇喜多秀家）をはじめ、大明国の勅使と、同月の十九日に漢城を出発し、多くの日をかけて、出向く者と帰還する者とともに各々梁山の左右に集合しました。そうしてお互いに喜び合いました。これにより、近いうちにわが国の名護屋に向けて急いで連絡の船を飛ばし、使者を派遣して、太閤殿下のご命令を蒙ったうえで、帰朝するのも近日中になろうと待っているところです。ほかのことはまた改めてお手紙差し上げるつもりですので、ここに筆を擱きます。

時におだやかな夏の風が南から吹いてきて、建物にも微かな涼しさが広がっています。和尚におかれては自愛珍重せられんことを。恐惶頓首。

五月九日、政宗、覚範寺侍衣に一筆拝上。

詩一首、手紙の最後に書き添えます。その詩に云う

こんなにも早くことが運ぶとは思いませんでした。今年、海を渡って朝鮮征伐に来てみれば、朝鮮や明国は早くも屈服して、我が掌中に収まることとなりました。いくさが終わり、後は国の治安をととのえ、安定を図るのにいましばらくを要するでしょうから、やはり日本に帰るのは秋風を待たねばならぬでしょう。

【余説一】 仙台市博物館所蔵伊達家文書「覚範寺虎哉宗乙宛書状写」には虎哉宛ての書の後に追而書があつて以下の通りである。（『治家記録』『松陰』にも載せるが、若干の文字の異同がある）。

「追啓 迄于朝鮮大明属扶桑之手裡、以立綴一絶者、軍旅之兎（忽）忙、吟未了也、可被加點削、…又資福寺東堂平安否、雖可投一章、依陣中紛喧黙止、其情以此一封可被高覽者也、至祝至祝」

ここに「以立綴一絶者、軍旅之兎（忽）忙、吟未了也、可被加點削」と、陣中あわただしい中で作ったので吟味不足だが、と言つて虎哉に「点削」を求めているところ、漢詩について未だ自信なく、師に意見を求める若い政宗の気持ち素直に表れている。手紙の本文も『十八史略』などに典拠のある表現を用い、勉強の跡を一生懸命披露している。

【余説二】 この手紙及び詩に対する虎哉和尚の返事及び詩一首、『治家記録』附録四、及び『虎哉録 斑寅集』（仙台覚範寺蔵版、木村俊彦編、木耳社、二〇〇三年刊）に載せる。

手紙には政宗の手紙と詩を七月十日に受け取ったとして、「其の書（手紙・筆跡）や、欧陽（欧陽詢・欧陽脩）・蘇子瞻（蘇軾）の翰墨か。…其の詩や、李白・杜少陵（杜甫）の光焰か。…拝誦すること数日、紙弊（やぶ）れ墨渝（かわ）ると雖も、手を釈（お）く能わず。甚だ奇、甚だ特と謂う可きなり」、書も立派、詩もみごとと大げさに持ち上げ、また贈られた筆の札を述べたうえで、詩一首を付している。

非啻字孫武兵法 齊に孫武の兵法を学ぶのみに非ず

杜詩韓集在胸中 杜詩・韓集 胸中に在り

吾公入海帰何晩 吾が公 海に入りてより 帰ること何ぞ晩き

有恨閑窓日暮風 恨む有り 閑窓 日暮の風

政宗公には孫子の兵法を学ぶという武辺のことばかりでなく、杜甫の詩、韓愈の文集にも造詣深く、胸中に蔵しておられる。まさに文人というべきか。我が君が朝鮮に渡ってからというものの、拙僧はずっとお帰りをお待ちしているが、早くお帰りにならぬものか。寺の窓辺で日暮れの風を眺めながら、政宗公のことを思い続けて、心から離れない。

なお齋藤莊次郎著『伊達政宗公』（金港堂書店、大正十四年刊）には虎哉の詩を引いて字に異同がある。「何啻字兵誦孫武／杜詩韓集在胸中／吾公渡海帰何晩／恨殺憐窓

覚範寺侍衣に拝上す。

詩一首、楮尾に繋ぐ。其の詩に云う、

何知今歳棹滄海

何ぞ知らん 今歳 滄海に棹さし

高麗大明属掌中

高麗・大明 掌中に属せんとは

匣劍囊弓治国処

劍を匣にし弓を囊にして国を治むる処

帰帆須是待秋風

帰帆は須く是れ秋風を待つべし

□『治家記録』卷十八下、文禄二年五月九日条。仙台市博物館所蔵伊達家文書「覚範寺虎哉宗乙宛書状写」〔『仙台市史』資料編11 伊達政宗文書2、文書番号942所収〕。『松陰』。『虎哉記 斑寅集』附録「木耳社、二〇〇三年刊」。

▽七絶。上平声一東韻（中・風）変格（起句踏落し）。

△虎哉への手紙の部分について、底本及び前記「書状写」、及び『虎哉記 斑寅集』附録に載せる「後虎哉和尚書」（以下「斑寅集」と略す）に基づき校勘する。細かな異同は略し、主要な部分だけを挙げる。

・「雖泛舟於風之順者」、「書状写」作「雖泛船待於風順者」〔舟〕は小船を表すゆえ、後文「艤船」に合わせて「船」に改むべし。「待」の字、拠って補うべし。・「艤船於老岐島」作「艤船着於老岐島」〔着〕の字、拠って補うべし。・「着」、「斑寅集」作「著」、同じ。・「候日之和」作「俟月之穗」。・「終無逆浪之難者」作「終無逆浪者」。・「討来者」作「誅来者」。・「自他所喜也」作「他所喜也」。・「追之」、「斑寅集」作「進之」。・「余事於期再信」、「書状写」作「余事期再信」、「斑寅集」作「余事猶期再信」。・「覚範寺侍衣」、「書状写」作「斑寅集」作「覚範寺衣鉢閣下」。

○「匣」講釈作「筐」。『講釈』云、筐或作匣、治国処或作敷德化、須是或作屈指。『松蔭』は引いて起句「何知今歳棹且滄海」、結句「帰帆須待秋風」に誤る。「且」の字は結句の「須」の字の下に入るべきか。〔「帰帆須是待秋風」の「是」に旁書して「且」と訂正したのが、筆写の際に誤って起句に紛れ込んだか。〕

●文禄二年（一五九三年、政宗二十七歳、虎哉六十四歳）五月九日の作。

○覚範寺虎哉和尚 虎哉宗乙は臨済宗の僧侶。政宗の父、輝宗の懇請を受けて政宗（梵天丸）の師となる。虎哉四十三歳、梵天丸六歳。以後、資福寺住持として政宗と共に米沢、岩出山、仙台の地で政宗の指導に当る。覚範寺開山。資福寺中興開山（十二世）。慶長十六年没、八十二歳。

○華藏 人の手紙の敬称。○廿二莫 二十二日。「莫」という特異な文字を使っているのは、『十八史略』卷一の記述に拠る。帝堯の時代、瑞草「蓂莢」（こよみぐさ）が生えたとして「草有り庭に生ず。十五日以前は日に一葉を生じ、以後は日に一葉を落とす。…名づけて蓂莢と曰う。これを観て以って旬朔を知る」とある。ここから後に「蓂」は日を表すことになった。ここはそれを使って『十八史略』学習の成果を示した。○浅野弾正少弼父子 浅野長政（一五四七～一六一一）。「弾正の少弼」はその官位名（弾正台の次官の意）。豊臣政権の五奉行筆頭。その子、名は幸長。○蔚山城 蔚山（ウルサン）は朝鮮半島東南部、釜山（プサン）の東北東約九〇キロの地にある。○新構城郭 蔚山倭城を指す。○亀井武蔵守 亀井茲矩（これのり）（一五五七～一六一二）。○梁山城 梁山（ヤンサン）は釜山の北約三〇キロの地。○扶桑 日本。○不弁治与不治 『十八史略』卷一、帝堯の時代の記述に「天下を治むること五十年、天下の治まるか治まらざるかを知らず」とある。ここではその表現を借りながら、治安定まらぬ状況を言う。○大明国之勅使將軍 勅使は沈惟敬、將軍は李如松。○洛陽城 漢城（ソウル）○羽柴備前宰相 宇喜多秀家（一五七二～一六五五）。文禄の役に大将として出陣。○繫楮尾「楮」は紙の材料になる「こうぞ」。ここでは手紙の意。その末尾に詩一首を繋ぐ。○棹滄海 海を渡る。○匣劍囊弓 劍を箱にしまい、弓をゆぶくろに収める。戦が終わること。○治国処 和平講和、治安回復。「処」は今それをやっているところ、という意味か。

正月にお寄せいただいたお手紙、朝鮮の蔚山（ウルサン）において謹んで拝読しました。まことに和尚と向い合ってお話するようで、読んで懐かし、披いてはまた読むの繰り返し、ここ数日は手から離せませんでした。和尚にはお身体お健やかかの由、慶びに堪えません。

私は三月十五日乗船し、順風を待ちましたが、「天候悪しく」未だ帆は掛けられぬままでした。ようやく二十二日に至って船出の用意をし、老岐の島に着くことができました。そしてまた風波の風ぐのを待ち、なんとか対馬の地に着きました。それから往々順風にまかせて、四月十三日について高麗の釜山浦に到着することが出来ました。その間、ひどい浪に見舞われることもあ

李白の「山中にて幽人と対酌す」に「兩人対酌すれば山花開く」。

秋になって季節の趣きも増し、宴進むうちに夕陽ははや傾いてきた。杉の本立が庭に影を落として、その色も次第に薄れてゆく。なお一杯と酌み交わす朋友同士の楽しい酒。半酔半醒のほろ酔い気分、宴席はいっそう華やかだった。

廿七 復覚範寺虎哉和尚書并詩

孟春之華絨、於朝鮮国蔚山而欽拝誦、誠如対席話、卷而懷之、披而手之、数日不得措耳、尊体安全之旨、慶大者也、予三月十又五日（*1）雖泛船（*2）〔待〕（*3）於風之順者、孤帆未掛、到廿二莫而艤船〔着〕（*4）於沔岐島、復候日之和、而著於対馬地、往々信順風、而四月十三日得到高麗釜山浦矣、終無逆浪之難者、尊老歎喜、察之者如開鏡乎、同十八日浅野彈正少弼父子相倡而揚軍旗、經三宿而著蔚山城、則敵不交鋒而敗北去、或藏礮壑、或竄海浜、追之步卒討来者、不知其数矣、此地臨江上、新構城郭、而以亀井武藏守為其固置之、又次二宿而入於梁山城、城者扶桑之軍兵居処也、然吾儕渡於朝鮮、不弁治与不治、頃大明国之勅使將軍已下之官者二人、与大高日共三国平均之事再興焉、故洛陽城所守之軍勢、羽柴備前宰相為始、并大明之勅使、同月之十又九日（*5）出於洛陽、過多日、而往与還俱各会梁山之左右、而自他所喜也、因茲日之近、向於我朝名護屋度飛船、企使者、蒙太閤殿下之貴命、而帰朝者、指日候之而已、余事於期再信、擲退筆者也、惟時薰風自南来、殿閣生微涼、自愛珍重、恐惶頓首、

五月初九日、政宗
 拝上覚範寺侍衣、
 詩一首繫楮尾、其詩云、

▲【校補】この虎哉宛書状については、別に仙台市博物館所蔵伊達家文書に収める「覚範寺虎哉宗乙宛書状写」がある〔『仙台市史』資料編① 伊達政宗文書2 所収、文書番号942（「書状写」と略す）。いま、これに拠り底本を校補する。（その他の異同については後文の△校異の部分を参照）。

*1 十又五日、原誤作支五日、拠書状写改。
 *2 泛船、原作泛舟、拠書状写改。

*3 〔待〕於風之順者、原脱待字、拠書状写補。

*4 〔着〕於沔岐島、原脱着字、拠書状写補。

*5 十又九日、原誤作支九日、拠書状写改。

覚範寺虎哉和尚に復する書并びに詩

孟春の華絨、朝鮮国蔚山に於て欽んで拝誦す。誠に席を対して話するが如く、巻きてこれを懷にし、披きてこれを手にし、数日措くを得ざるのみ。尊体安全の旨、慶びの大なる者なり。

予三月十又五日、船を泛べて風の順なる者を〔待つ〕と雖も、孤帆未だ掛けず。廿二莫に到りて、船を艤して沔岐の島に〔着く〕。復た日の和むを候ちて、対馬の地に著く。往々、順風に信せて、四月十三日に高麗釜山浦に到るを得たり。終に逆浪の難き者無し。尊老の歎喜、これを察すること鏡を開くが如き乎。

同十八日、浅野彈正の少弼父子 相倡えて軍旗を掲ぐ。三宿を経て蔚山城に著けば、則ち敵は鋒を交えずして敗北し去り、或いは礮壑に藏れ、或いは海浜に竄す。これを追うて歩卒討ち来る者、其の数を知らず。此の地、江上に臨み、新たに城郭を構う。而して亀井武藏守を以て其の固めと為してこれを置く。又二宿を次りて梁山城に入る。城は扶桑の軍兵の居る処なり。然れども吾が儕、朝鮮に渡り、治と不治とを弁ぜず。

この頃 大明国の勅使將軍已下の官者二人、大・高・日と共に三国平均の事再興す。故に洛陽城守の所軍勢、羽柴備前宰相を始めと為し、大明の勅使と并せて、同月の十又九日、洛陽より出でて多日を過し、往と還と俱に各おの梁山の左右に会す。而して自他の喜ぶ所なり。

茲に因りて日の近き、我が朝名護屋に向いて飛船を渡し、使者を企て、太閤殿下の貴命を蒙りて帰朝せんこと、日を指して之を候つのみ。余事は再信を期するに於いて、筆を擲退するものなり。

惟れ時に薰風南より来り、殿閣 微涼を生ず。自愛珍重せられよ。恐惶頓首。
 五月初九日、政宗。

晩秋逢月興尤奇
風靜雲収愛夜時
朋友對斟三盞酒
清光開席到家遲

晩秋 月に逢うて 興尤も奇なり
風靜かに雲収まりて 夜を愛する時
朋友對いて斟む 三盞の酒
清光に席を開きて 家に到ること遅し

□『治家記録』卷三十七、寛永九年九月十三日条。『松陰』『覺書』『政宗記』
▽七絶。上平声四支韻（奇・時・遲）。

△「侍友人之瓊筵」、「治家記録」脱「侍」字。「逢月」、「覺書」作「逢夕」。「對斟三盞酒」、「政宗記」作「對酌三盞酒」。また『覺書』には題して云う、「暮秋十三夜 毛利甲州宅に而」。『政宗記』題「同（寛永）四年九月十三夜、於仙台城濟家衆（臨濟宗の僧侶たち）各呼給ひ月見に」。

●寛永九年（一六三二年、六十六歳）九月十三日の作。仙台。但し『政宗記』に拠れば寛永四年（一六二七年、六十一歳）の作ということになる。

○毛利宰相秀元 毛利秀元。甲斐守、毛利元就の孫、毛利輝元の養子、長門国府中藩主、慶長十九年没、七十二歳。 ○第 邸に同じ。やしき。

○本朝風俗以九月十三夜擬中秋之名月 陰曆九月十三夜の月は、八月十五夜の月に次いで月が美しいとされ、「のちの月」と呼んで、月見の宴を催した。日本独特の風習。八月十五夜の月を芋名月と称するのに対して、十三夜の月は豆名月、栗名月という。醍醐天皇の延喜九年（九一九）、清涼殿で月見の宴を催したのに始まるという。また『和漢三才図会』卷四（時候部）「九月十三夜の条に拠れば、保安二年（一一二二）、関白藤原忠通（一一〇九七～一一六四）に「九月十三夜、月を翫ぶ」の詩あり、「十三夜の影は古に勝り、数百年の光は今に若かじ」の句がある。十三夜の詩宴はこの夜から始まるという。上杉謙信（一五三〇～一五七八）にも有名な「九月十三夜、陣中の作」の七絶がある。「霜は軍營に満ちて秋氣清し、数行の過雁 月三更、越山并（あわ）せ得たり能州の景、遮莫（さもあらばあれ）家郷遠征を憶ふを」。 ○佳招 よき招き。

○瓊筵 李白の「春夜宴桃李園序」に「瓊筵を開きて以って花に坐し、羽觴を飛ばして月に酔う」とある。 ○伸懷 「伸」は陳述、表白。杜甫の「兵車行」に「役夫敢て恨みを伸べんや」などとある。しかし「伸懷」という言葉は漢語には見ない。 ○晩秋 九月十三日は陰曆で秋の終わり。あと半月

あまりで冬になる。 ○對斟 對酌に同じ。差し向かいで酒を酌む。李白「山中にて幽人と對酌す」の詩に「兩人對酌すれば山花開く、一杯一杯復た一杯」とある。ここは朋友の友が仄声なので酌（仄声）の字が使えず、斟（平声）の字を使った。 ○清光 月の清い光。白居易「八月十五日夜、禁中に独り直し、月に対して元九を憶う」詩に「猶お恐る清光同じく見ざることを、江陵は卑湿にして秋陰足る」。 ○開席 開宴。（あるいは酒席をお開きにする意のつもりか。）

今宵、晩秋の十三夜、豆名月を愛でて、感興とくにすばらしい。風は静まり雲も消えて、この美しい月夜を楽しめば、酒もこよなくまぐ、友と差し向かいでしきりに酒を酌む。名月の下、宴席を設けて、つい夜更かしし、屋敷に戻るのがすっかり遅くなつてしまった。

廿六 題關

秋來雅興夕陽斜
杉影映庭色也些
一盞猶斟朋友酒
半醒半醉座中花

題關く
秋來 雅興 夕陽斜めなり
杉影 庭に映じて 色也た些かなり
一盞猶斟朋友酒
半醒半醉 座中花やぐ

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽七絶。下平声六麻韻（斜・些・花）。

△「題關」、「詩鈔」作「無題」。「色也些」、「松陰」作「色亦些」。

●作詩年未詳。

○雅興 高雅な興致。唐の牟融「報本寺に遊ぶ」詩に「雅興共に尋ぬ 方外の樂しみ」とある。 ○夕陽斜 唐の錢起の詩に「丹鳳城頭 晚鴉噪ぎ、行人の馬首 夕陽斜めなり」とある。 ○色也些 「也」は「また」。「些」は「わずか」。いずれも口語的な表現。 ○半醒半醉 杜牧「昔遊を念う」（「三體詩」卷一所収）に「半醒半醉 遊ぶこと三日、紅白の華開く 烟雨の中」。宋の陸游「伝神に題す」に「半醒半醉 常に日を終え、土に非ず農に非ず 一老翁」とある。酒に酔ったような醒めたような、ほろ酔い気分の状態。 ○座中花

清爽、春の気の濃艶に勝ると知りました。殿には蘭の舟に月を載せて、松島に遊ばれたとのこと。きつと張継の「楓橋夜泊」の「夜半の鐘声 客船に到る」の句を思い出されたことでしょう。

廿四 水辺月

寛永五年七月十七日

應饗于東昌寺円真長老

老丈室時所作

水辺の月

寛永五年七月十七日

饗に東昌寺円真長老の丈室に应ぜし時

作りし所なり

西風吹後月方新

賓主浮觴猶甚親

此景尤奇見簾外

水辺佳興惱吟身

西風吹きて後 月方に新たなり

賓主 觴を浮かべて 猶お甚だ親しむ

此の景尤も奇にして 簾外を見れば

水辺の佳興 吟身を悩ます

□『治家記録』卷三十四、寛永五年七月十七日条。『松陰』『政宗記』『覚書』

▽七絶。上平声十一真韻（新・親・身）。

△「月」、「覚書」作「夕」。「方」、「政宗記」作「正」。「尤奇」、「松陰」作「最奇」。

また『覚書』題「水辺月 武州江戸於東禅寺」。「政宗記」題「同（寛永）三年四月十八日、於武州江戸の嶺南、政宗を振舞御慰にとて、寺中学僧を集め詩會」。

●寛永五年（一六二八年、六十二歳）七月十七日の作。仙台。但し『政宗記』卷十に拠れば寛永三年（一六二六年、六十歳）四月十八日、江戸東禅寺での作という。同じ詩を寛永五年、東昌寺でも詠んだものか。しかし詩に「西風（＝秋風）吹きて後 月方に新たなり」とあるから秋の詩でなければならぬ。『治家記録』寛永五年七月十七日の条に記すのを良しとすべきであろう。

○東昌寺円真長老 東昌寺は仙台城下の臨濟宗寺院。円真長老は虚白円真。東昌寺第十六世住持、寛永十九年東昌寺にて没。

○西風 秋風。○月方新 七月十七日だから、秋風が吹き初めて、この秋初めての月見をしたと言うことだろう。○水辺 東昌寺の境内に池があった。余説参照。

○悩吟身 「十六題闕」の詩に「惜しむ可し 李桃の老身を悩ますを」の句があり、こゝも「吟身を悩ます」と読ませるのであろう。或いは「吟に悩む身」か。「苦吟の身」という言葉なら賈島の「三月晦日 劉評

事に贈る」に「三月正に三十日に当る、風光 我が苦吟の身に別る」などと見える。

秋風が吹き初めて、この秋初めての丸い月が空に浮かんでいる。私は円真和尚とともに酒を酌み交わし、大変昵懇の時を過ごしている。この秋の夜の景色のすばらしいこと。丈室から簾を掲げて外を見れば、池のほとりの興趣のすばらしいこと、言葉を失うほどだ。これをどう詩に詠んだものか、わたしはしばしば心を悩ますのであった。

【余説】仙台市青葉区の青葉神社境内にある池は元は東昌寺の敷地であった。この池が政宗の時代からそこに在ったことは次の伝承から確認できる。翠羽軒歌丸（小松長善）の「日誌」（明治十九年）「手植松の弁」に「東昌寺ハ伊達家の内祖東昌寺殿の靈位を移し、開基は政宗卿伯父一風軒大和尚の開基なり、其の頃この境内に古びたる池あり、往古より漚麻池といへり、いかなる旱魃にもその水ひる事あらず、幾千年といふ事たしかならず、……政宗卿折々伯父一風軒大和尚を訪ひける寺の庭に漚麻池と申ハ心といふ文字に作りたる池なりけるか、政宗卿ある時鉢の松を持来なり、この中島に自ら手植にせられけれハ、後年手植の松と云り、又漚麻池も心といふ文字によりて後ち心の池と称ける」とある。（『仙台郷土研究』第十卷第九号〔昭和五十五年復刻版〕「青葉神社創建当時の記録」、記録第十三号「明治十九年日誌（抜書）」による）。ちなみに「漚麻」とは麻を水に浸すという意味だと思われる。

廿五 九月十三夜

寛永九年九月十三日

應饗于毛利宰相秀元

卿第時所作

九月十三夜

寛永九年九月十三日

饗に毛利宰相秀元卿の第に应ぜし時

作りし所なり

本朝風俗、以九月十三夜擬中秋之名月。予今夜依佳招待友人之瓊筵。遊宴之余、卒賦詩一首伸懷云。

本朝の風俗、九月十三夜を以って中秋の名月に擬す。予今夜佳招に依りて友人の瓊筵に待す。遊宴之余、卒に詩一首を賦し、懷いを伸ぶと云う。

思見清光佳興荐
道人緩打五更鐘

清光佳興の荐を思い見て
道人 緩かに打つ 五更の鐘

□『治家記録』卷三十八、寛永十二年八月十五日条。『松陰』『覺書』

▽七絶。上平声二冬韻（第・濃・鐘）

△「佳興荐」、『覺書』作「佳興夥」。また『覺書』題「於松島二」。

●寛永十二年（一六三五年、六十九歳）八月十五日の作。松島。

○待月 李白「江上懷い有り」に「月を待ちて月未だ出でず」。和歌の世界では松島と言えは月の名所。しかも「松島」と「待つ」は掛詞。それゆえ「松島に月を待つ」というイメージが出てくる。○吟筈「筈」は「つえ」。「吟筈」は詩人が詩を作りながら携える杖。宋の蔡正孫「魏梅墅に寄訊す」〔聯珠詩格〕卷三所収に「吟筈 肯て山齋に過らんや未や、近ごろ新吟多少の詩有りや」とある。○茫茫 はてしなく広がるさま。また、ぼうっとしてはつきりしないさま。ここは後者であろう。○一氣濃 深い霧に包まれている。月がいつまで待っても姿を現さない。○思見 日本語の「おもひみる」「おもんみる」（思いめぐらす）の漢語化。「十二 春日作」にも見える。主語は結句の「道人」。○清光佳興荐「清光」は月の光。「荐」は「薦席」の「薦」に通じ「しきもの」。ここでは月見の宴席を指す。○道人緩打五更鐘「道人」は僧侶。宋の蘇軾「縦筆」に「白頭蕭散滿霜風／小閣藤牀寄病容／報道先生春睡美／道人輕打五更鐘」とある。病床に臥す蘇東坡を思いやって、「道人輕く打つ五更の鐘」、坊さんが夜明けの鐘をそつと打つ、というもの。「五更」は午前四時ごろ。ここでは政宗公たちが中秋の月が見えるのを待って、一晩中、宴を張っているの、夜が明けてしまつてはまずいと思ひやり、瑞巖寺の僧がゆつくりと鐘を打つたということ。蘇軾の「輕く打つ」を「緩やかに打つ」と変えた。このところ石川忠久氏は「道人緩やかに打て」と命令形に読む（『日本人の漢詩』大修館書店、二〇〇三年刊）、二四七頁）。

松島で中秋の名月を賞でんと、杖をつき月を待てば、海は秋の霧に包まれて茫々と霞み、月は一向に見えない。宴は続けど、月は雲間を出たと思えばまた曇り、早や夜明けも近い。瑞巖寺の僧は、われらが月見の宴に氣遣つてか、

ゆつくりと五更の鐘を打つ。

【余説一】この夜、松島は曇つて月がなかなか見えなかったこと、政宗の歌に見える。『黄門政宗公御歌詩稿』には「寛永十二年松島にて」と題して、

曇る也雲はあやなし所から秋の最中にあふそ嬉しき（180）

秋の最中さやけき影はなけれども思ひこそやれ雲のそなたを（181）

いつるより時のまにまにはれ曇る月にいくたひものおもふらん（182）

とある。また『貞山様御筆御歌』にも年は記していないが、「八月十五夜、しほかまのうらつたいし、松島の波に舟をさしよするほと、雨ふり侍りしに」として

月はたゝくまなきをのみ人やみんくもるけしきもしほかまのうら（163）

うすきりのまかきか島の木の間よりほのみし月のかけそたへなる（164）

雲間もる月やをしまのあけかたにさひしさそへてなく千とり哉（165）

所からなかめはつきしありあけの月まつしまの秋の夕へは（166）

とある。恐らく同じ年の歌であろう。「雨ふり」「くもる」「うすきり」の中、「時のまにまにはれ曇る」「木の間よりほのみし月」「雲間もる月」を眺めつつ、「あけかた」まで「ありあけの月まつ」一夜であったことが分かる。

最後の歌にもある通り、「松島」は「待つ島」であるから、雲間の月の現れるのを「待つ」のも、場所がら相応しいみやびであった。

【余説二】この詩に次韻した清岳和尚の詩が残っている（仙台市博物館）。「太守黄門公 蘭舟を泛かべて松島に到り、遊興有る余の次で、新詩一絶を題し、天上の嫦娥（月）を翫弄せらる。その清円の佳句や、恰も一輪の名月の如し。誰か敢て瑕疵を指さんや（きずを指摘しようや）」とあるところを見ると、政宗が詩を清岳和尚に示して斧正を請うたのであろう。それに続けて、清岳和尚は「予、瓊筵に陪せずと雖も、佳作を伝聞すれば、則ち黙止す可きに非ず」として、政宗の詩の「第・濃・鐘」に韻を会わせて、次の詩を作っている。

不待雅筵孤伴筈 雅筵に待せず 孤り筈を伴とす

定知秋意勝春濃 定めて知る 秋意 春の濃やかなるに勝るを

蘭舟載月遊松島 蘭舟 月を載せて 松島に遊ぶ

可記楓橋夜半鐘 記す可し 楓橋夜半の鐘

宴席に陪することかなわず、私は独り杖を友として月を見ました。そうして秋の気の

△「佳客」、『覺書』作「佳閣」。また『覺書』題「中秋 武州江戸にて」。

●寛永五年（一六二八年、六十二歳）八月十五日の作。江戸。

○群碧天 義未詳。「群碧」という言葉は漢籍には見えない。或いは「群青」と言いたいところ、二六対で「里」とあわせて仄声にしなければならぬので、同じ「あお」を表す「碧」の字に置き換えたか。○玉蟾 月の異名。月の中に蟾蜍（ひきがえる）がいるという中国の伝説に基づく。方干「中秋の月」に「涼霄烟靄の中、三五玉蟾の秋」。○自然円 本来のまん丸な姿になっている。○醒醉 しらふの人と酔うた人。陶淵明「飲酒」其の十三に「一士は長（つね）に酔い、一夫は終年醒む、醒醉還た相笑い、發言各々領せず」とある。しかし杜甫「春に帰る」に「此の身醒めて復た酔い、興に乗じて即ち家と為す」とあるのに拠れば、一人の人間について醒めてはまた酔う状態。政宗の「廿六題闕」の詩に「一盞猶お斟む朋友の酒、半醒半酔 座中花やぐ」とある用例からすると、半ば醒め半ば酔うた、ほろ酔い気分の状態と見るべきか。「廿六題闕」の注釈参照。

千里の彼方まで真つ青に澄み切った秋の空。今宵は中秋、月はまさにまん丸。月見の宴もたけなわに、欄干によつて空を見上げる客人たちはみなほろ酔い気分。客人たちを包む月の光。煌々たる満月の光が、池の水面いっぱいひろがっている。

【余説二】『治家記録』に「御月見詩歌ヲ詠セラル、始ハ晴天、夜深クルニ及テ曇ル。故ニ御作不同ト云フ。」とあり、「其一」としてこの詩を、「其二」として次の「一歳唯期今夜明」の詩を載せる。蘇軾の「湖上に飲す 初めは晴れ後に雨ふる」二首に似せた気配あり。

【余説二】この詩に次韻した林羅山（道春）の詩が残っている（仙台市博物館）。

中秋一絶 奉和黃門君之瓊韻 道春拝

（中秋一絶 黃門君の瓊韻に和し奉る 道春拝す）

陰晴遙望夜来天 陰晴遙かに望む 夜来の天

雲上依然定可円 雲上 依然 定めて円かなるべし

水殿今移広寒界 水殿 今移す 広寒の界

清光一片落吟辺 清光一片 吟辺に落つ

廿二 同

同上

一歳唯期今夜明
何知山岫暮雲生
月光何処回頭見
恰暗暗空至曉更

同じく

上に同じ

一歳 唯だ期す 今夜の明
何ぞ知らん 山岫 暮雲生ずとは
月光は何処ぞと 頭を回らして見れば
恰も暗暗の空 曉更に至る

□『治家記録』卷三十四、寛永五年八月十五日条。『松陰』『覺書』

▽七絶。下平声八庚韻（明・生・更）。

△「回頭見」、「松陰」作「回頭看」。「至」、「松陰」『覺書』作「到」。

●寛永五年（一六二八年、六十二歳）八月十五日の作。江戸。

○山岫「岫」は「みね」。陶淵明「帰去来辞」に「雲は無心にして以つて岫を出づ」とある。○暮雲 夕暮れ時の雲。王維「観獵」の詩に「射鵬の処を回看すれば、千里暮雲平かなり」とある。○回頭 こうべをめぐらす。振り返る。白楽天「長恨歌」に「頭を回らして下 人寰を望む処、長安を見ずして塵霧を見る」とある。○暗暗 暗い。唐の杜牧「鍾陵の幕吏を罷めて十三年、来りて湓浦に泊し、旧に感じて詩を為る」詩に「揺揺たり遠堤の柳、暗暗たり十程の煙」とある。○曉更 夜明けどき。

一年のうちで中秋の今宵こそは、夜空が晴れて月がよく見えるようにと祈るばかりなのに、残念なことよ、山の峰に雲が出て来て、月は雲間に隠れた。月を待ち空しく時を過ごして、月はどこかと振り返って探しているうちに、とうとう真つ暗な空は白々と明けそめてきた。

廿三 中秋賞月於松島

寛永十二年所作

中秋 月を松島に賞す

寛永十二年 作りし所なり

今宵待月倚吟筵
滄海茫茫一氣濃

今宵 月を待ちて 吟筵に倚れば
滄海は茫茫として 一氣濃やかなり

△「月方明」、「松陰」作「月正明」。「挙盞程」、「松陰」作「挙盞呈」（呈も庚韻）。「主賓」、「覚書」作「重賓」。「談闌」、「覚書」作「談々」。「佳席」、「松陰」「政宗記」並作「佳節」。「到」、「覚書」作「至」。また「覚書」題「夏夕 於保春院」。

●寛永十年（一六三三年、六十七歳）六月十一日の作。仙台。

○保春院清岳和尚 覚範寺の住持、清岳宗拙。

○薫風 初夏の東南の風。白居易「首夏南池独酌」に「薫風 南より至り、我が池上の林を吹く」とある。○挙盞程 「程」の義不詳。日本語の「するほどに」という時間的経過を表現する言葉が漢詩に入り込んだか。

薫風が夏空を渡って、月が明々と夜空に光る。この月見の宴に興味はいや増し、和尚と私は盃を重ねている。そうこうするうちに日暮れ時からほじまつた酒も話もたけなわになって、静かに夜は更けていく。ふと気がつけば帰るべき時間をとくに過ぎてしまつて、はや真夜中になってしまつた。

【余説】『覚書』にこの詩と並べて和歌一首、「五月雨の雲間に影ハほのめきて入ほとそなき夏の夜の月」。

廿 涼簾

同月廿四日赴饗于光明寺

玄策西堂丈室時所作

涼簾

同月廿四日 饗に光明寺玄策西堂の丈室

に赴きし時作りし所なり

千山万水寺楼連

千山万水 寺楼に連なる

夏日避炎坐雅筵

夏日 炎を避けて 雅筵に坐す

窓外吹晴涼正至

窓外吹き晴れて 涼正に至る

珠簾捲月夕陽天

珠簾 月に捲く 夕陽の天

□『治家記録』卷三十七、寛永十年六月廿四日条。『松陰』『政宗記』『覚書』。

▽七絶。下平声一先韻（連・筵・天）。

△「坐雅筵」、「政宗記」作「坐瓊筵」、「覚書」作「申雅筵」。「涼正至」、「政宗記」作

「正涼到」、「覚書」作「涼正到」。また「覚書」題「於光明寺」。

●寛永十年（一六三三年、六十七歳）六月二十四日の作。仙台。

○光明寺玄策西堂 光明寺は仙台城下の臨済宗寺院。慶長九年に伊達郡より移ったといわれる。古岫玄策は光明寺の十九世住職、仙台開山。「西堂」は臨済宗妙心寺派における僧の位階の一。十級のうちの第六級、五等教師西堂職。○千山万水 唐の張喬「維楊の故人に寄す」（『三体詩』卷一）に「千山万水 玉人遥かなり」とある。○雅筵 「筵」はしきもの。「雅筵」はすばらしい宴席。○吹晴 日本語の「ふきはる」（風が吹いて空が晴れる）をそのまま使ったのであろう。「明けしらむ波路の霧は吹きはれて遠島みゆる秋の浦風」（『玉葉集』、藤原景綱）など。○珠簾 李白「怨情」に「美人 珠簾を捲き、深く坐して蛾眉を嚙む」とあるなど。○捲月 月の出を待つて簾を捲く。二十四日の月の出は夜十時ごろだが、日が暮れたので月を待つて簾を捲き上げたのであろう。

多くの山々や河がこの寺の二階の窓の向こうに連なっている。いい眺めだ。夏のある日、私は炎熱を避けんとして、この寺に納涼の宴に招かれた。窓の外にはいい風がさつと吹いて、涼しさがこの宴席に吹き込んでくる。日はようやく西に傾いて、空が夕焼けに染まってきた。珠の簾を巻き上げて月の出を待つことにしよう。

【余説】『覚書』にこの詩と並べて和歌一首、「村雨の過て涼しき夕影に釣簾の外内ハ月ぞさやけき」。

廿一 八月十五夜

寛永五年所作

八月十五夜

寛永五年作りし所なり

千里秋空群碧天

千里の秋空 群碧の天

玉蟾此夜自然円

玉蟾 此の夜 自然ら円かなり

倚欄佳客皆醒醉

欄に倚る佳客 皆な醒醉

正照清光滴水辺

正に照らす清光 水辺に満つ

□『治家記録』卷三十四、寛永五年八月十五日条。『松陰』『覚書』

▽七絶。下平声一先韻（天・円・辺）。

□『治家記録』附録一。『松陰』。

▽七絶。上平声一東韻（空・風・紅）。

●作詩年未詳。

○光陰 時間。光は昼または日、陰は夜または月。李白の「春夜宴桃李園序」に「夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり」とある。○三界空 「三界」は仏教用語で一切衆生の生死輪廻する三種の世界（欲界・色界・無色界）。『楞嚴經』に「三界、空花の如し」とあり、寒山の詩に「畏る可し三界の輪（めぐる）や、念念未だ曾て息わず」とある。○明朝 陸游「臨安に春雨初めて霽る」に「小樓一夜春雨を聴き、深巷明朝杏花を売る」。○朶朶 枝枝。○蒼蒼 青々と生い茂るさま。『詩経』秦風・蒹葭に「蒹葭蒼蒼」。

「光陰は百代の過客」、あつという間に春も終わらんとして、まことに「三界、空花の如し」である。そこで花の下に席を設け、春風に吹かれて、逝く春を惜しむこととした。しかしもう春も終わって、明日、もし花を洗う雨が降ったならば、枝々には青い葉ばかりが残り、庭面は散った花びらで紅くおわれているであろう。

十八 新緑

寛永八年四月九日

応饗于東昌寺円真長老

丈室時所作

新緑

寛永八年四月九日

饗に東昌寺円真長老の丈室に應ぜし時

作りし所なり

春尽万山正緑新
寺前延席更無塵
主賓共酌盃中酒
終日吟遊別袖頻

春尽^つきて 万山正に緑新^{みどりあら}たなり
寺前^{じぜん}に席を延^のべて 更に塵^{ちり}無し
主賓^{しゅひんとく}共に酌^くむ 盃中^{はいちゅう}の酒
終日^{しゅうじつ}吟遊^{ぎんゆう}して 別袖^{べつしゅう}頻りなり

□『治家記録』卷三十六、寛永八年四月九日条。『松陰』『覚書』『政宗記』

▽七絶。上平声十一真韻（新・塵・頻）。

△「正緑新」、『治家記録』作「緑正新」（正・緑いずれも仄声）。「延席」、『覚書』『延』

字の傍らに「筵」の字を記す。また『覚書』には「廿四 水辺の月」の次にこの詩を並べ「新緑」と題し、「同所にて」と記す。

●寛永八年（一六三一年、六十五歳）四月九日の作。仙台。

○無塵 塵埃がない。世俗を超脱している。唐の劉得仁「秋夜 僧院に宿す」《三体詩》卷三所収）に「禪寂無塵の地、香を焚いて所帰を話す」。○吟遊 この語、漢籍には見えない。日本語の表現か。「吟行」に同じ。張籍「逢賈島」に「寺を出て吟行すれば日已に斜めなり」。○別袖 袖を振って分かれること。唐の韓愈「晩に江口に泊す」に「首を廻らすも 那ぞ語を聞かん、空しく看る 別袖の翻るを」。

春が終わって、山々はまさに新緑の季節となった。我らは新緑に包まれた東昌寺の境内に席を設けて、一献傾けることとなった。まことに俗界を離れて清しい気分である。円真和尚も私も共に酒を酌み、詩を作って、時の経つのも忘れた。そして終日の詩酒徴逐に心満ちて、何度も何度も袖を振りながら、和尚と別れたのであった。

【余説】『覚書』にこの詩と並べて和歌一首、「散過し花の梢ハみとりにてなかめをうつす四方の山なみ」。

十九 夏月

寛永十年六月十一日

応饗于保春院清岳和尚

丈室時所作

夏月

寛永十年六月十一日

饗に保春院清岳和尚の丈室に應ぜし時

作りし所なり

薰風渡夏月方明
此興主賓拳盞程
日暮談闌佳席靜
已歸去滯到三更

薰風^{くんふう} 夏を渡りて 月方^{まさ}に明らかなり
此^この興^{きょう} 主賓^{しゅひん} 盞^{さん}を拳ぐる程
日暮^{ひくれ} 談闌^{たんなわ}にして 佳席^{かせき}靜かなり
已^{すで}に歸去^{きよ}滯^{とど}りて 三更^{さんこう}に到る

□『治家記録』卷三十七、寛永十年六月十一日条。

▽七絶。下平声八庚韻（明・程・更）。『松陰』『政宗記』『覚書』。

「御製春日觀花詩」に「枝上流鶯早く、千紅万紫香る」。宋の蔡正孫「春暮」(『聯珠詩格』所収)に「千紅万紫 都て狼藉、猶お薔薇落後の花有り」。○曝錦『和漢朗詠集』巻上に紀齊名(ただな)の詩を引いて「山桃復た野桃、日 紅錦の幅を曝す」とある。中国にも花の咲き乱れる様子、花の散った様子を錦を敷いたようだと喩える例として、杜甫「清明二首」詩に「秦城の樓閣 鶯(一作煙) 花の裏(うもと)、漢王の山川 錦繡の中」、劉禹錫「春日懷いを書す」詩に「野草芳菲たり紅錦の地、遊糸繚乱たり碧羅の天」などがある。

春の色とりどりの花が艶を競っていたと思つたら、いつの間にかもう散つて、塵となってしまうのか。今日は東昌寺の円真和尚に会つて、宴席を共にすることになった。昨夜は一晚中、風が吹き、雨が戸を叩いていたが、一夜明けて今朝、門前の村々は花が散つて、まるで錦を広げたようではないか。

【余説一】『治家記録』にはこの詩と並べて歌一首を録す。「イカハカリ惜ミテモマタ惜レン春コトニナル花ト知スハ」。

【余説二】春の花の咲き乱れる様子、或いは落花散り敷く様子を錦に喩える表現は、劉禹錫など中国の詩に源流があるが、『古今和歌集』の「見わたせば柳さくらをこきまぜて宮こぞ春の錦なりける」(素性法師)、『和漢朗詠集』の小野篁の詩句「野に着いては展べ敷く 紅錦繡、天に当つては遊織す 碧羅綾」、同じく慶滋保胤の「洞中には清浅たり 瑠璃の水、庭上には蕭条たり 錦繡の林」などのように、日本の詩歌に多く見られ、日本的なイメージとして定着していたと言ふことができる。

十六 題関

寛永十二年三月十一日

招金地院最岳和尚東禪

寺嶺南和尚饗於亭上時

所作

千紅万紫総成塵
可惜李桃惱老身
一夜風光催雨牖

題関

寛永十二年三月十一日

金地院最岳和尚と東禪寺嶺南和尚を招き

亭上に饗せし時作りし所なり

千紅万紫 総て塵と成る
惜しむ可し 李桃 老身を悩ます
一夜風光(風来りて) 雨を催す牖

半庭敷錦落花春

半庭 錦を敷く 落花の春

□『治家記録』巻三十八、寛永十二年三月十一日条。『松陰』『覚書』『政宗記』

▽七絶。上平声十一真韻(塵・身・春)。

△「総成塵」、『覚書』作「惣来塵」、『政宗記』作「惣成塵」。「風光」、『政宗記』作「風来」(光・来ともに平声)。「落花春」、『覚書』作「薄花春」。また『覚書』題「弥生初武州江戸於金地院」、『政宗記』題「暮春」

●寛永十二年(一六三五年、六十九歳)三月十一日の作。前作と同工。なお【補二】の「失題 散楽を張り諸臣をして陪(陪) 観せしむる時、楼(桜)花盛んに開く」参照。

○金地院最岳和尚 金地院は江戸芝の臨濟宗寺院。以心崇伝(一五六九～一六三三)が創建。最岳和尚は崇伝の後継、金地院第二代住職(寛永十年から)、最岳元良。明暦三年没。○東禪寺嶺南和尚 「十二 春日の作」の注参照。

○惱老身 花が散つて、歳歳年人同じからず、老いの身には時間の推移が憂わしい。○一夜風光 『政宗記』が「風来」に作るのがまさるか。同工の十五暮春作の転句「一夜風吹敲戸雨」の「風吹」との対応から言えば「風来」に作るのが可。○半庭 庭の半分。

春の色とりどりの花が艶を競っていたと思つたら、いつの間にか全て散つて塵となってしまう。この季節の推移の早さよ。何とも惜しいことだ。桃や李がはらはらと花を散らすこの季節。年老いた私も、春の終わり、わが身の終焉にころろが行つて、物思いに沈んでしまう。昨夜は一晚中、風が吹き、雨が窓を打つて、庭半分が散った花びらで錦を敷き詰めたようになってしまった。

十七 暮春

暮春

可惜光陰三界空
花辺開席坐春風
明朝若有洗花雨
朵朵蒼蒼庭上紅

惜しむ可し 光陰 三界空しく
花辺に席を開いて 春風に坐す
明朝 若し花を洗う雨有らば
朵朵は蒼蒼 庭上は 紅ならん

目城で越年。

○千里 見渡すかぎり。この詩、「千里」で始まり、「鶯」が現れ、「煙雨の中」で結ばれるのは、杜牧「江南の春」に「千里鶯啼いて緑 紅に映ず、……、多少の楼台 煙雨の中」とあるのによる。○韶光 春ののどかな光。唐の太宗の詩に「韶光 令序を開き、淑氣 芳年を動かす」。○故宮 新たに築城を始めた仙台城に対し、名取郡北目城を指してこう言ったか。○半庭 庭の中ほど。

歳改まり、新春の光があたり一面を包んでこの古い城に満ちている。庭の中ほどで春風に包まれながら酒を酌む。鶯が物思いに沈む私を慰めるように囀りかける。桃や李の花が開いて、あたりは春雨に包まれる。

十四 芳園宴

寛永六年正月十七日

赴饗于覺範寺清岳和尚

丈室時所作

寛永六年正月十七日

饗に覺範寺清岳和尚の丈室に赴きし時

作りし所なり

一気暖加風景新
不言花亦似留人
浮盃相語賓兼主
終日陪筵芳苑春

一気 暖加わって 風景新たなり
不言の花も亦た人を留むるに似たり
盃を浮かべ相語る 賓と主と
終日 筵に陪す 芳苑の春

□『治家記録』卷三十五、寛永六年二月十七日条。『松陰』『政宗記』

▽七絶。上平声十一真韻（新・人・春）。

△「相語」、『松陰』作「相話」。『陪筵』、『松陰』作「陪宴」。

●寛永六年（一六二九年、六十三歳）二月十七日の作（『治家記録』の日付に拠れば、底本に「正月」とあるのは「二月」の誤り）。仙台。

○一気暖加 一年の氣候を二十四節氣に分け、十五日を一気とする。一気ごとに風が変わり温かさが加わる。○風景 風と光。○不言花 白居易「元家履信の宅を過る」に「落花語らず 空しく樹を辞す」、『聯珠詩格』に「尽日 花に問うも 花は語らず、誰が為にか零落し 誰が為にか開く」、蘇軾

「吉祥寺の花」に「太守 花に問うも 花は語らず、誰が為にか零落し 誰が為にか開く」とある。○浮盃 酒を飲むこと。三月上巳の曲水の宴の「浮觴曲水」（さかずきを曲水に浮かぶ）「流觴曲水」による表現。○陪筵 目上の人との宴席に同座する。○芳苑 李白の「春夜宴桃李園序」に「桃李の芳園に会し、天倫の樂事を序す」とある。ここは梅の香りのする覺範寺の美しい庭園。

年が明け、日の経つにつれて温かさも加わり、風も光も日ごと春らしくなってきた。梅の花は何もいれないが、人を去り難い気持ちにさせる。杯を浮かべながら話に花が咲く。そうして一日が過ぎて行く。かくて日がな一日、梅の花の香る美しい庭園の春を眺めながら、和尚と同席したのだった。

【余説】「不言の花」については、政宗の和歌にも「ものいはぬ花も心のありかほにまたきに咲てかけや見すらん」（『黄門政宗公御歌詩稿』106）とある。

十五 暮春花

寛永六年三月十七日

赴饗于東昌寺円真和尚

方丈時所作

寛永六年三月十七日

饗に東昌寺円真和尚の方丈に赴きし時

作りし所なり

千紅万紫自成塵
今日宴遊逢友人
一夜風吹敲戸雨
前村曝錦落花春

千紅万紫 自ら塵と成る
今日の宴遊 友人に逢う
一夜風吹いて 戸を敲く雨
前村 錦を曝す 落花の春

□『治家記録』卷三十五、寛永六年三月十七日条。『松陰』『政宗記』

▽七絶。上平声十一真韻（塵・人・春）。

△「暮春花」、『政宗記』題「暮春作」。

●寛永六年（一六二九年、六十三歳）三月十七日の作。仙台。

○東昌寺円真和尚 仙台城下の臨濟宗寺院。虚白円真はその十六世住持。名は靈真とも。寛永十九年没。○千紅万紫 色とりどりの花が艶を競うさま。

●寛永四年（一六二七年、六十一歳）三月十七日。仙台。

○覚範寺清岳和尚 覚範寺は仙台城下の臨済宗寺院。その第四代住持が清岳宗拙。正保元年没、六六歳。○佳興 感興豊かな情趣。王維の「崔渼陽兄季重前山興」に「秋色 佳興有り、況んや君 池上 閑なるをや」とある。

朝から馬にまかせて門を出てきたが、途中の橋のたもとで清岳和尚に出会った。和尚に招かれて楽しいひと時を過ごすうちに、陽ははや西に傾いて、夕陽に包まれた山影はいかにも静かである。「兩人対酌すれば 山花開く」ではないが、この寺での我らの心満ちた詩酒の遊びにつられたかのように、境内は百花咲き乱れて残りの春に妍を競っている。

【余説】『治家記録』寛永四年三月に「十七日甲申。覚範寺へ御出、清岳和尚饗シ奉ラル。公春日ノ詩ヲ作り玉フ。清岳和尚・東昌寺真長老・資福寺祝峯座元以下、各和韵ヲ献セラル」として、和韵の七絶十二首を載せる。

十二 同

寛永十二年二月廿四日

赴饗于江都東禪寺嶺南

和尚丈室時所作

寛永十二年二月廿四日

饗に江都東禪寺の嶺南和尚の丈室に

赴きし時作りし所なり

惜春竟日興方加

思見千山帶晚霞

吟友相談遊宴席

東風有意寺前花

春を惜んで 竟日 興方に加わる

思ひ見る 千山 晚霞を帯ぶを

吟友相談ず 遊宴の席

東風 意あり 寺前の花

□『治家記録』卷三十八、寛永十二年二月廿四日条。『松陰』『政宗記』

▽七絶。下平声六麻韻（加・霞・花）。

△「春日作」、『政宗記』題「春日」。

●寛永十二年（一六三五年、六十九歳）二月二十四日。江戸。

○東禪寺嶺南和尚 東禪寺は江戸の臨済宗寺院。日向国飢肥藩主伊東祐慶が建立。嶺南崇六は江戸東禪寺の開山。生れは日向国。のち京都妙心寺住持。

寛永二十年没。六一歳。○竟日 終日。一日を過ごす。白居易「新庭樹を翫し、因りて懷う所を詠ず」に「竟日 此の幽を尋ぬ」。○思見 日本語の「おもひみる」「おもんみる」（思いめぐらす）をそのまま漢字にしている。○帶晚霞 唐の盧照鄰の「長安古意」に「龍は宝蓋を銜んで朝日を承け、鳳は流蘇を吐いて晚霞を帯ぶ」とある。政宗はここでも「かすみ」の意味で使っている。

春を惜しんで、嶺南和尚とともに一日を過ごせば、詩酒徴逐の興趣はつる。もう周りの山々が夕もやに霞んでいることだろう。今日のこの宴席のすばらしいこと。詩について語り合う喜び、酒を酌み交わす楽しさよ。春風はそんな二人の気持ちを分かっているかのように、寺の境内に美しい花びらはらはらと散らすのだ。

【余説】『治家記録』寛永十二年二月廿四日の条に「廿四日乙巳。東禪寺嶺南和尚へ御饗応トシテ御出、詩ヲ賦シ玉フ」としてこの詩を載せる。翌日の条「廿五日丙子、東禪寺嶺南和尚ヨリ公ノ昨日御詩ヲ和シテ進上セラル」として和韵の七絶二首を載せる。

十三 漫興

慶長六年正月元日所作

漫興

慶長六年正月元日作りし所なり

千里韶光滿故宮

半庭酌酒坐春風

黃鶯語我慰愁意

桃李花開煙雨中

千里の韶光 故宮に満ち

半庭 酒を酌み 春風に坐す

黄鶯 我に語りて 愁意を慰め

桃李 花開く 煙雨の中

□『治家記録』卷二十一、慶長六年正月元日条。『松陰』

▽七絶。上平声一東韻（宮・風・中）。

△「煙雨」、『松陰』『治家記録』作「烟雨」、煙・烟同じ。

●慶長六年（一六〇一年、三十五歳）正月元日。前年の末十二月二十四日に仙台城普請の縄張初めを行い、この正月十一日から仙台城の普請を開始。この正月は名取郡北

□『治家記録』卷二十二、慶長十三年一月下旬「江戸御発駕」、二月上旬「仙台城御着」の後に「○御道中ニ於テ、御詩歌アリ。云々」としてこの詩を引く。『松陰』『覚書』▽七絶。下平声六麻韻（家・餘・花）。

△「問来」、「覚書」作「向來」。「路転除」作「道転途」。「湿衣」作「沾衣」。「此時」作「因思」。また『覚書』には題して云う、「寛永の頃武州へ御参勤の砌、道中にて俄に春雨しけれハ、旅雨といふ題にて」。

●慶長十三年（一六〇八年、四十二歳）正月下旬。江戸より仙台への帰途。

○江都 江戸 ○奥府 仙台城 ○信馬 唐の岑参「西掖省郎事」に「薄暮 鞭を垂れ 馬に信せて帰る」。○路転除 「転」は「うたた」と読み、ますます、いよいよの意。「除」は遠い、はるか。唐の許渾「下第して崇聖寺に寓居す」(『三体詩』卷三)に「玉を懷いて京華に泣く、旧山帰路除かなり」、唐の劉長卿「李穆に酬ゆ」(『三体詩』卷二)に「孤舟相訪うて天涯に至る、万転の雲山 路更に除かなり」。また蘇軾「澄邁駅通潮閣二首其一」に「倦客愁えて聞く 帰路の遥かなるを」。

江戸からの帰途、急ぐ旅とてなく、馬に任せて仙台への道のりを歩む。時々、人家に立ち寄って、仙台までどれほどかと道のりを問えば、問うたびにいよいよ道は遠い。春の小糠雨が旅の衣をしっとり濡らして、日はまさに暮れようとしている。ああ、この時節、故郷の仙台城に植えた梅の花はもう咲き始めたらうか。

【余説二】『治家記録』慶長十三年一二月条に

「○正月下旬江戸御発駕（日不知）

○二月乙卯小上旬仙台城御着（日不知）

○御道中ニテ御詩歌アリ。覚範寺虎哉和尚、猪苗代法橋兼如、同兼与、片岸意運等、和シ奉ル。附録ニ載ス。

春雨旅懐

旅行信馬過人家 往往問来路転除 春雨湿衣日将暮 此時開否故郷花

初春ノ雨ハ旅寝モツラカラシ裁ニシ木々ノ花ヲ思ヘハ」

とあり、さらに同書附録之四には、

「慶長十三年歳在戊申早春之末、政宗公自武之江戸被帰奥之旧梓、途中逢雨、以春雨旅懐為題賦唐律、詠和歌、於茲幕下英雄有詩有歌。公帰家之翌日、在国之緇素聞之、勿不有佳作伸雅懷、亦後題春雨旅懐云

衣錦晝遊春雨初 家人可憶主婦歟 属東君手花天下、借筭前村慶有余

政宗公国へ帰り玉フ道ニテ細雨袂ヲ霑ス折節、詩歌ノ詠アリ。色々マタル、花ノ上ヲムサシアフミカケテオホシメシヤリケル馬上ノ御志ノ深キ事、奥ノ海ノ底ニモ譬ヘ難シ。然ルヲ虎哉和尚キコシメシ、伝ヘテ同シク春雨旅懐ト云事ヲ自ラ題シ玉テ人々ニモ勸メ給ヘリ。歌ニモ其心ハヘアラマホシクテイサ、カ申シ綴リ侍リヌ

法橋兼如

雨ニ猶旅ノカヘサヤイソキケンサキナン花ノ台思ヒテ

法橋兼嶼

オモヒキヤワタル山路ノ春雨ニ花サクコロヲ待ツメントハ

意蓮片岸

旅ニシモイトハヌ袖ノ春雨ハコト葉ノ花ノ色ニコソシレ」

とある。

【余説二】この詩から二十一年後の寛永六年、政宗六十三歳の時の歌、「喜帰故郷」と題して、「思ひきやはるかにへたつ故郷に馬にまかせて帰るへしとは」とある。

十一 春日作

寛永四年三月十七日

応饗于覚範寺清岳和尚

丈室時所作

春日の作

寛永四年三月十七日

饗に覚範寺清岳和尚の丈室に应ぜし時

作りし所なり

朝来信馬出門辰 朝来 馬に信せて門を出る辰
行路橋辺逢友人 行路橋辺 友人に逢う
夕日風光山影静 夕日の風光 山影静かに
寺前佳興百花春 寺前の佳興 百花 春なり

□『治家記録』卷三十三、寛永四年三月十七日条。『松陰』『政宗記』

▽七絶。上平声十一真韻（辰・人・春）。

△「夕日」、「政宗記」作「今日」。

開く煙雨の中」。○檐外「檐」は「ひさし」。○月朦朧 来鵬の「寒食」(『三
体詩』卷二所収)に「蜀魄啼き来りて春寂寞、楚魂吟じて後 月朦朧」とある。

春の日、春風に包まれてゆったり腰を下ろし、琴の調べを楽しむ。けむる
春雨の中、静かに朋友と語り合う。いつの間にか日は暮れ、簾をかけて軒
の外を見れば、梅の花咲く戸口のあたり、月がおぼろに霞んでいる。

八 同

風落雲閑窓外辺

同じく

風落ち雲閑かなり 窓外の辺

双樽対客不知眠

双樽 客に対して 眠るを知らず

中秋莫羨管弦月

中秋も 羨る莫し 管弦の月

一刻千金春夜天

一刻千金 春夜の天

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽七絶。下平声一先韻(辺・眠・天)。

●作詩年未詳。

○風落 風が止む。唐の李子卿「府試授衣賦」に「山静かに風落ち、天高く
氣涼し」。○雲閑 雲はのどかに空に漂う。○双樽 並び置かれた酒だる。

○中秋莫羨管弦月 「莫羨中秋管弦月」(中秋管弦の月に羨る莫し)とあるべき
ところ、平仄の関係で中秋の前に持ってきたもの。中秋管弦の月も勝ること
はない。それより「一刻千金春夜天」の方が勝るということ。「羨」は超過す
る。勝る。うらやむ。「管弦月」は中秋の名月の下、管弦を奏して楽しむこと。

○一刻千金春夜天 宋の蘇軾「春夜」に「春宵一刻直千金」。

春の夜、風が止んで、窓の外を眺めれば、雲はのんびりと空に浮かぶ。酒
つばを並べて客人と向かい合えば、眠るのも忘れてさしつさされつ夜が更け
る。仲秋の夜の月を眺めながらの管弦の楽しみも確かにいいが、「春宵一刻
直千金」の今宵の楽しみには、到底かなうまい。

九 同

臥牀夢竟意花豊

同じく

臥牀 夢より覚めて 花の豊かなるを意う

窓外今宵春色濃

窓外 今宵 春色濃やかなり

捲箔看来離落月

箔を捲きて看来る 離落の月

梅花影動五更風

梅花の影は動く 五更の風

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽七絶。上平声一東韻(豊・濃・風)。

●作詩年未詳。

○意花豊 或いは「花意豊」の誤写か。○春色濃 宋の李華「邸壁」(『聯珠
詩格』卷八)に「一雨一晴 春意濃やかなり」。○捲箔「捲」はまく、ま
きあげる。「箔」は「すだれ」。○離落 まがき、かきね。李郢「江亭秋霽」
(『三体詩』卷二)に「野人の離落 豈華の初め」などある。○五更 日

没から夜明けまでの夜の時間を五等分した、第五番目の時間。午前四時前後。

○梅花影動 唐の韋莊「寒食」(『聯珠詩格』卷十三)に「好〔あたか〕も是れ簾
を隔てて花影動く」。宋の林逋「山園小梅」に「疏影横斜 水清浅、暗香浮
動 月黄昏」。

夜更けて夢より覚めれば、(梅の香りに) ああ梅の花がずいぶん咲いたなと
思う。窓の外は今宵、春の雰囲気がいかに濃やかだ。すだれを巻き上げて
まがきの上に昇った月を眺めやれば、夜明け間近の五更の風に、梅の花の影
がかすかに揺れる。

十 春雨旅懷

慶長十三年正月下旬

從江都歸奥府途中所作

春雨旅懷

慶長十三年正月下旬

江都より奥府に帰る途中作りし所なり

旅行信馬過人家

旅行き 馬に信せて 人家を過る

往往問来路転除

往往問 来たるも 路転た除かなり

春雨湿衣日将暮

春雨 衣を湿して 日將に暮れんとす

此時開否故郷花

此時 開くや否や 故郷の花

梅の花びらが地面に散っているが、天地の間、風はそよとも吹いていない。さてはうぐいすが梅の枝に止まって、花びらが散ったのか。それとも旅人が春の景色に心迷って、思わず梅林に迷い込んで一枝を折ったのか。

【余説】この詩の発想の背景には『後撰和歌集』巻一春上に見える「鶯のなきつる声にさそはれて花のもとにぞ我は来にける」の歌がある。『和漢朗詠集』にも見える白居易「春江」の詩の「鶯の声に誘引せられて花の下に來り、草の色に拘留せられて水の辺に坐す」の句に基づく歌だが、政宗がこの漢詩を詠んだときに思い浮かべていたのはおそらく和歌の方であろう。同じ『後撰和歌集』に「なほざりに折つる物を梅の花こき香に我や衣そめてん」など、梅の花を女性に喩える和歌の世界の伝統がこの漢詩の背後にも流れている。

六 遊寺見梅

寛永六年春所作歟

今年移宅未栽梅

入寺始知花已開

城裏女兒何夢知

一枝携去報春来

寺に遊んで梅を見る

寛永六年春 作りし所か

今年 宅を移して 未だ梅を栽えず

寺に入り始めて知る 花已に開くを

城裏の女兒 何ぞ夢にも知らん

一枝 携え去きて 春の来るを報ぜん

□『治家記録』巻三十五、寛永六年二月十七日条に「十七 芳園宴」の詩と諸家の和韻を記した後、「○此春公遊寺見梅ノ御詩アリ 今日ノ御作ナル歟、且ク茲ニ附ス」と記す。『松陰』

▽七絶。上平声十灰韻（梅・開・来）。

△「城裏」、「松陰」作「城裡」。裏・裡同じ。

●寛永六年（一六二九年、六十三歳）春。仙台。

○今年移宅 寛永四年（一六二七年）、政宗は幕府の許可を得て城下若林の地〔現在の若林区古城の仙台刑務所の地〕に屋敷を経営した。寛永五年十一月、江戸から戻ると、直ちに若林城に入り、移徙の祝儀を催した。政宗はこの後、在国の間、越年・饗応等特別の時、仙台城で過ごす以外は、ここに常住したという。○未栽梅 まだこの時、若林城には梅の木（朝鮮から持ち帰り、

仙台城に植えてあった臥龍梅）を移植していなかった（後に移植され、その二代目が今、刑務所内にある）。○城裏女兒 「城」は中国では町の意味だが、ここでは城（若林城）の意。「裏」は「うら」ではなく「なか」の意。「女兒」はおんなの子だが、ここでは「御奥の女中達の事」（『講釈』）と解するのがよからう。○何夢知 「夢にもうせず」という日本語表現が漢詩の中に紛れ込んでいる。

今年、住まいを若林の地に移したが、庭にはまだ秘蔵の梅を移していない。今日、城下の寺に入って梅の花がはや咲き出しているのに気がついた。若林の奥女中たちは屋敷に梅の花がないので、もう咲いたとは夢にも知るまい。どれ、一枝折って持ち帰り、春が来たぞと教えてやるか。

【余説】この年正月の法橋兼与の歌に「あたらしき色香ながらも見ぬ人に見せんと手折むめの花哉」とある。

七 春月

寛永四年正月廿五日所作

春月

寛永四年正月廿五日作りし所なり

春天楽瑟坐東風

朋友対談煙雨中

日暮捲簾見檐外

梅花門戸月朦朧

春天 瑟を楽しんで 東風に坐す

朋友 対いて談ず 煙雨の中

日暮 れて簾を捲き 檐外を見れば

梅花の門戸 月朦朧

□『治家記録』巻三十三、寛永四年正月廿五日条。『松陰』『政宗記』

▽七絶。上平声一東韻（風・中・朧）。

△「煙雨」、「松陰」「政宗記」作「烟雨」、煙・烟同じ。

●寛永四年（一六二七年、六十一歳）正月二十五日。仙台。

○瑟 こと。ここは平仄の関係で琴（平声）の代りに瑟（仄声）の字を使った。○東風 春風。○煙雨中 「煙雨」は細くけむる雨。唐の杜牧「江南の春」（『三体詩』巻一所収）に「南朝四百八十寺、多少の楼台 煙雨の中」。同じく杜牧「昔遊を念う」（『三体詩』巻一所収）に「半醒半醉遊ぶこと三日、紅白華

▽七絶。上平声四支韻（遲・時・知）。

●寛永四年（一六二七年、六十一歳）正月十七日。仙台。

○本朝一人一首 書名。林鶯峰撰。一〇巻。日本の漢詩一人一首で、約四八〇首を収める。万治三年（一六六〇）自序、寛文五年（一六六五）刊。この詩は巻七所収。（新日本古典文学大系『本朝一人一首』一九九四年、岩波書店刊）p.251）。その林鶯峰の注に「此の詩、先考〔亡父、林羅山〕に示して和を要む」とある。【余説二】参照。○余寒 立春後の寒さ。杜甫「題張氏隱居」に「澗道の余寒 冰雪を歴、石門の斜日 林丘に到る」。○信手 手の動くに任せる。酒に自然と手が伸びる。白楽天「琵琶行」に「眉を低れ手に信じて続々と弾き、説き尽くす 心中無限の事」。○三盞酒 「盞」は小さな杯。○独楽 独りの楽しみ。宋の司馬光「独楽園の記」（『古文真宝後集』）に「逍遙徜徉、惟だ意の適く所のままなり。名月時に至り、清風自ずから来る。行くも牽かるる所無く、止まるも掬めらるる所無く、耳目肺腸、巻きて己が有と為す。：知らず、天壤の間、復た何の楽しみ有りてか此れに代う可けんや。因りて合わせてこれを命けて独楽と曰う。」とある。

春が来たのに、余寒未だ去りやらず、梅の花はまだ咲かぬ。春の雪が夜になってだんだん積もってきそうな頃おい。手にまかせて独り酒を酌む。一杯一杯また一杯。この酔いのうちの独りの楽しみは誰にも分かりはすまい。

【余説一】この詩は政宗の自筆が仙台市博物館に残っている。

【余説二】『治家記録』に「十七日乙酉。御詩ヲ賦セラル。諸山ノ和尚并ニ民部卿法印林道春林永喜各和韵ヲ進セラル。皆附録ニ載ス」とあり、附録四に次韻の詩を載せる。

春到江山朝日遅 春は江山に到りて朝日遅し
東風吹雪刺寒時 東風雪を吹いて寒を刺す時
天降白玉唯今見 天 白玉を降して唯今見る
州産黄金自古知 州産の黄金 古より知らる
林道春

【余説三】俗に「雪は豊年のみつき（貢）」あるいは「雪は豊年のしるし（瑞）」と言われるとおり、雪が多く降るのは豊年の前兆とされる。北国に住む政宗にとって、正

月に降る雪は豊年を約束するめでたいものであった。雪の夜、一人酒を酌む満足感の奥に、豊年の予兆を喜び、民の安寧をことほぐ思いがあったろう。このように正月の雪を豊年のしるしとしてことほぐ考え方は『万葉集』巻十七に「あらたしき年のはじめに豊の稔（とし）しるすとならし雪の降れるは」（葛井諸会）とあるのをはじめ、古来しばしば言い伝えられているところである。ちなみに中国でも『詩経』小雅・信南山「上天同雲、雨雪雰雰」の毛伝に「豊年の冬は必ず積雪有り」、『文選』卷一三謝惠連「雪の賦」に「雪」尺に盈つるとき則ち瑞を豊年に呈す」、また『宋書』符瑞志下に「孝武帝」大明五年（四六二）正月戊午元日、花雪殿庭に降る。時に右衛將軍謝莊殿より下るに雪衣に集る。還りて上に白して以て瑞と為す」などがある。

五 落梅

花落乾坤風未吹
樹間料識有黃鸝
不然行客惱春色
自入梅林折一枝

落梅

花落ちて 乾坤 風未だ吹かず
樹間 料り識る 黃鸝有るを
然らずんば 行客 春色に悩まされ
自ら梅林に入りて 一枝を折りしか

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽七絶。上平声四支韻（吹・鸝・枝）。

●作詩年未詳。

○乾坤 天地。○料識「料」おしはかつて、「識」知る。推量する。○黃鸝 うぐいす。寛永二年の歌会における資福寺の祝峰和尚の「庭梅」と題する詩に「黃鸝若し是れ来りて投宿せば、只だ枝頭に向つて 花を損なう莫れ」とあるのは、うぐいすが枝に止まって花を散らすというモチーフにおいて共通。○行客 旅人。○惱春色 宋の王安石の「夜直（『聯珠詩格』卷三所収）に「春色 人を悩まして眠り得ず」。○折一枝 唐の杜秋娘の「金縷衣曲」（『聯珠詩格』卷三所収）に「花開きて折るに堪えなば須らく折るべし、花の残（しほ）むを待ちて空しく枝を折る莫れ」とあるように、花の枝を手折るという行為には女性との関係を象徴するようなニュアンスがある。「春色に悩まされ」「一枝を折る」というところに、王朝風の色好みを寓するが。

□『治家記録』卷三十九上、寛永十三年正月元日条。『松陰』『覺書』

▽七絶。上平声十一真韻（新・塵・春）。

△「黄鶯」、「覺書」作「黄鳥」。また『覺書』『治家記録』題「試毫」。

●寛永十三年（一六三六年、七十歳）正月元日。仙台。（年齢は数え、以下同じ）。

○東風 春風。 ○和光同是塵 『老子』第四章、第五十六章「其の光を和らげて、其の塵に同ず」輝きを和らげて塵とひとつになる。ここでは春のやわらかな光が万物を包んでいるというようなニュアンスと思われる。 ○漸次第に、だんだんに。 ○梅吐玉 梅の花がほころびる。「吐」は「吐花」「吐葩」の吐で花が咲くこと。「玉」は梅のつぼみが白く美しいさまを玉に喩えたもの。唐の張謂「早梅」に「一樹寒梅 白玉の条」。 ○黄鶯出谷 『詩経』小雅・伐木に「鳥鳴くこと嚶嚶たり、幽谷より出でて喬木に遷る」（鳥が和らぎ鳴いて、冬の深い谷間から出て高い木に移る）。

年改まり、春風が吹いて、一夜のうちに万物みな新たになった。日はやわらかに暖かく、すべてが春の光をあびている。残雪も少しずつ消えて、梅のつぼみはほころび、うぐいすが谷を出て太平の春にさえずっている。

三 江上霞

寛永二年二月十七日

詩歌御会所作

江上朦朧帯片霞
孤舟漾盡夕陽斜
一声一曲歌昏月
歸去漁翁自到家

江上の霞

寛永二年二月十七日

詩歌の御会にて作りし所なり

江上朦朧として 片霞を帯ぶ
孤舟漾い盡して 夕陽斜めなり
一声一曲 昏月に歌い
歸去の漁翁 自ら家に到る

□『治家記録』卷三十一、寛永二年二月十七日条。『松陰』『政宗記』

▽七絶。下平声六麻韻（霞・斜・家）。

△「漁翁」、「松陰」作「漁舟」。

●寛永二年（一六二五年、五十九歳）二月十七日。仙台。

○詩歌御会 『政宗記』卷十によれば、「寛永二年乙丑二月十七日於仙台北城詩

歌会、春日詠江上霞、和歌」として、政宗の「難波江や浪もなきまで霞みつ、かげほのかなる蟹の釣舟」以下、和歌十一首、その後に覚範清岳、東昌泥牛、瑞巖碧堂、資福祝峰、昌仁仁藏主の五人の僧の漢詩五首を挙げ、最後に政宗のこの詩を録する。政宗の上引の和歌を漢詩に仕立てたものである。 ○江上 漢語では川のほとりの意だが、ここでは川面の意味で使っている。 ○片霞 「霞」は中国では朝焼け、夕焼けの輝きの意だが、ここでは歌会の題にあるように、日本語の「かすみ」の意味で使っている。「片霞」は薄くたなびく夕もや。 ○漾盡 日がな一日ただよい尽して、日が暮れたの意。『講釈』は云う、「盡の字は盪の誤写ならんか」と。そうだとすれば「漾盪」は「ただよい揺れる」。 ○夕陽斜 唐の銭起の詩に「丹鳳城頭 晚鴉噪ぎ、行人の馬首 夕陽斜めなり」とある。 ○一声一曲 柳宗元「漁翁」に「欸乃（あいだい）一声 山水緑なり（漁師の舟歌が一声響いて、山水は緑）。同じく唐の許渾「謝亭送別」に「勞歌一曲 行舟を解く、紅葉青山 水急に流る」。 ○昏月 黄昏の月。中国にない言葉。 ○歸去漁翁 陶淵明「歸去來の辞」に「歸去來兮（帰らんぬいざ）」とある。同じく「桃花源記」に桃花源を訪ねる漁師が登場する。ここはその陶淵明の世界を下敷きになっている。

川のほとりは薄くたなびく夕もやに包まれて、ぼんやりとかすんでいる。一艘の舟が波に揺られて川面を漂い、夕陽が沈む。船の上の漁師は夕月の下、のどかに舟歌を歌い、さあ帰ろうとひとり家路をたどる。

四 春雪

寛永四年正月十七日

所作人本朝一人一首

余寒無去発花遅
春雪夜来欲積時
信手猶斟三盞酒
醉中独楽有誰知

春雪

寛永四年正月十七日作りし所

本朝一人一首に入る

余寒去ること無く 花を発くこと遅し
春雪 夜来 積らんと欲するの時
手に信せて猶お斟む 三盞の酒
酔中の独楽 誰有りてか知らん

□『治家記録』卷三十三、寛永四年正月十七日条。『松陰』

漢詩三十一首を収める。本稿でこの書を引用する場合には『抜書』と略す。

六、『貞山公集』東京大学史料編纂所蔵本（古典文庫『伊達政宗公集』に翻印）。作並清亮編。奥書に「右／貞山公集／東京府荏原郡大井村二四八伊達宗基氏所蔵／明治三十一年六月謄寫了」とある。漢詩三十一首を収める。作並清亮は大正四年没、享年七十五歳。

七、『貞山公詩鈔』一卷。（『続々群書類従』卷十三詩文部所収、明治四十二年刊）。七絶八首、五絶一首を収める。『続々群書類従』卷十三「例言」に「もと伯爵伊達家の所蔵より転写せり」と言うのは、右の伊達宗基氏所蔵『貞山公集』を指すと思われる。本稿でこの書を引用する場合には『詩鈔』と略す。

○これらのテキストの他に近代の注釈として鈴木栄一郎・千坂庸夫著『文武名將伊達政宗卿詩歌要釈』（仙台扶搖会、昭和十年刊）に収める「伊達政宗卿御詩講釈」（内題「貞山公御作貳拾首謹講」、千坂庸夫撰）があり、詩二十首について評釈を加えている。本稿でこの書を引用する場合には『講釈』と略す。そのうち三首は上記『黄門政宗公御歌詩稿』に未収である。よって本稿末尾にそれを補い、注釈を加える。

○『黄門政宗公御歌詩稿』原文に付された訓点是一部誤りもあるので、本稿では必ずしもそれに拠らず、一部は独自に書き下し文を作った。

○注釈は政宗が幼少より漢詩学習の手引きとしたと思われる『三体詩』聯珠詩格」などに見える唐・宋の詩句を挙げながら、政宗がそれぞれの詩を作ったときに意識の底にあったと考えられる詩句にも注目できるようにした。

○政宗の詩句には一部日本的な表現もあるので、その特徴を示すために、漢語とのズレにも触れるようにした。

仙台黄門君御詩稿

一 元旦試觚

時物春来催我吟
詩情酒渴共何禁

元旦試觚

時物 春来 我が吟を催す
詩情 酒渴 共に何ぞ禁ぜん

屠蘇沈醉忘才拙
和答黄鵬新語音

屠蘇に沈酔して才の拙さを忘れ
和答す 黄鵬新語の音

□『治家記録』附録一。『松陰』

▽七絶。下平声十二侵韻（吟・禁・音）。

△禁「松陰」講釈作「堪」堪は下平声十三覃韻なので不可。

●作詩年未詳、正月元日の作。

○元旦試觚 元旦の筆はじめに詩を作る。「觚」はむかし文字を記すに用いた木の札で、「觚を操る」というと「文を作る」の意になる。「試觚」は試筆、筆はじめ。○時物 四季折々の景物。ここは花や鳥など春を感じさせるもの。杜甫「故著作郎貶台州司戸滎陽鄭公虔」に「紙を操りて終夕酣なり、時物遐想に入る」。○詩情 詩を詠みたくなる気持ち。劉禹錫「秋思」に「晴空一鶴 雲を排して上る、便ち詩情を引きて碧霄に到る」。○酒渴 酒を飲みたいと思う心。「酒渴」は元来、酒によって喉が渇く意だが、ここでは「酒に渇く」、すなわち酒を飲みたいという気持ちを表している。○沈酔 酒に酔いつぶれる。○和答 別人の詩に次韻して（同じ韻字を使って）詩を作る。ここではうぐいすの声に合わせて詩を作る意。○黄鵬新語音「黄鵬」はうぐいす。「新語の音」は、うぐいすの初音。

冬が去り、万物に春がめぐってきて、そぞろ歌心がかきたてられる。めでたき春に、歌心も酒の渇きも抑えることはできない。屠蘇酒にすっかり酔って、自分の才能の拙いのも忘れ、うぐいすの初音に合わせて、一首吟じてみた。

二 同

寛永十三年所作

東風一夜物咸新
天日和光同是塵
残雪漸消梅吐玉
黄鶯出谷万年春

同じく

寛永十三年に作りし所なり

東風 一夜 物咸な新たなり
天日 光を和らげ是の塵を同じうす
残雪 漸く消えて 梅 玉を吐き
黄鶯 谷を出ず 万年の春

伊達政宗漢詩校釈

*
島 森 哲 男

【凡例】

○本稿は伊達政宗の漢詩三十三首について校訂注釈を加えたものである。

○テキストは『黄門政宗公御歌詩稿』中の漢詩を収めた部分「仙台黄門君御詩稿」「仙台市史」資料編9「仙台藩の文学芸能」「仙台市史編さん委員会編、平成二〇年刊」一藩主の文学」p.167～p.171に拠る。漢詩三十首を収める。

○『仙台市史』が底本としたテキストは、四代藩主伊達綱村の右筆、藤原知平が綱村の息子、吉村（後の五代藩主）の命により、「旧記小説及人口所在」から「拾収」した政宗の和歌、漢詩などを編纂して献上した「黄門政宗公御歌詩稿」の草稿本である（元禄十六年「一七〇四」奥書）。もと仙台の古書店尚文館収集の写本で、現在は仙台市博物館に収蔵されている。

○このテキストと同系統の別本に左の各写本がある。

一、宮城県図書館蔵本『仙台黄門公詩歌稿』

内題「仙台黄門君御詩稿」「仙台黄門君御詠歌」

翻印↓綿拔豊昭・岡本聡編『伊達政宗公集』〔古典文庫、平成一〇年刊〕

二、宮城県図書館蔵本『仙台黄門公詩歌集』

三、宮城教育大学附属図書館蔵本『仙台黄門君御詩歌集』

「明治二十九年伊藤一翁写」

四、齋藤報恩会蔵本『政宗公忠宗公御詠歌』

○他に政宗の漢詩を収録するものに左の各書がある。

一、『伊達の松陰』〔『仙台叢書』第一巻所収〕。慶長十九年（一六一四）成立。

その末尾に「詩文門」として、漢詩三十一首（七絶二十九首、五絶二首）を収める（p.82～p.86）。この部分は政宗死後「年代未詳」の追補である。本稿でこの書を引用する場合には『松陰』と略す。

また『伊達政宗公集』〔古典文庫〕には宮城県図書館蔵本の影印を収める（p.271～p.300）。『仙台叢書』第一巻所収本とは異なる。

二、『政宗記』卷十（第二期戦国史料叢書10『伊達史料集（上）』〔小林清治校注、人物往来社刊〕所収）。奥書によれば卷十は寛永十九年（一六四二）の成立。政宗が参加した詩歌の会での詩や歌が他の参加者の作品と共に記録されている。本稿でこの書を引用する場合には『政宗記』と記す。

三、『木村宇右衛門覚書』〔伊達政宗言行録』〔小井川百合子編、新人物往来社刊〕として翻刻〕。慶安五年（一六五二）頃成立。政宗晩年の小姓木村宇右衛門の聞き書き。その下巻に「大〔太〕守公御詠の詩歌、…少々覚侍るを書しるす」として七絶十一首を収める（p.176～p.178）。本稿でこの書を引用する場合には『覚書』と略す。

四、『貞山公治家記録』三十九卷附録四卷（『伊達治家記録』〔昭和四八～四九年、宝文堂刊〕に翻字あるいは影印）。編年体の記録。某月某日「詩歌ノ御会」などとして参加者の詩や歌を引用。政宗の漢詩二十一首を載せる。また同書附録之一には「御著述及ヒ言行履歴等或ハ年月不知或ハ年月二不関者皆此卷ニ載ス」とあって、作詩年次不明の詩九首を載せる。併せて三十首。本稿でこの書を引用する場合には『治家記録』と略す。

五、『御記録拔書』〔古典文庫蔵本（古典文庫615『伊達政宗公集』〔綿拔豊昭・岡本聡編、古典文庫刊〕に影印）。編年体の詩歌集。

* 宮城教育大学国語教育講座